

亀塚古墳
Kamezuka Tumulus

浜松市教育委員会

2019年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2019



例　　言

- 1 本書は、浜松市西区吳松町地内で実施した亀塚古墳の調査報告書である。
- 2 亀塚古墳は、平成 31 年（2019）2 月 25 日に浜松市の史跡に指定された。
- 3 調査は、亀塚古墳の保護に関わる基礎的な情報を得るために、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が土地所有者の承諾を得て、測量調査および踏査を実施したものである。
- 4 亀塚古墳にかかわる調査は、今回の調査が初めてであり、このたびの調査を 1 次調査とする。
- 5 現地調査の期間は、平成 30 年（2018）2 月 19 日・20 日である。
- 6 現地調査は、鈴木一有・和田達也（浜松市文化財課）が担当し、山中美歩・原伸明・北澤志織・小杉直孝・坪井里恵（浜松市文化財課）が補佐した。
- 7 本書の執筆は、鈴木一有・川西啓喜・和田達也が分担して行った。執筆・編集の分担は目次に示す。写真撮影は、現地写真・遺物写真ともに和田が行った。
- 8 Fig.3・4 の旧状写真は鈴木敏則氏より提供を受けた。また、PL.1-1 は、浜松市博物館が所蔵している。
- 9 Fig.6-2 は宮本利雄氏の協力を得て、図化及び写真撮影を行った。
- 10 調査にかかわる諸記録および採集遺物は、浜松市文化財課（浜松市地域遺産センター）が保管している。なお、1981 年採集資料は浜松市博物館が保管している。
- 11 本書で用いる座標値は世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 12 遺物番号は遺物の種別に関わりなく連番を付した。
- 13 本書で報告する土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 14 本書で報告する土器等の断面と種別の関係は以下の通りとする。

□ 墳　輪

■ 須恵器

■ 陶　器

- 15 本文中の引用文献などの表記については以下のように略す。

教育委員会→教委　（財）浜松市文化協会→浜文協　（財）浜松市文化振興財団→浜文振

- 16 本書の作成にあたり以下の方々のご協力・ご教示を得た（敬称略）。

酒井基寿、宮本利雄、大谷宏治、高橋克壽

目 次

例 言

第1章 序 論 (和田) 1

- 1 調査の概要 1
- 2 亀塚古墳をめぐる環境 2

第2章 調査成果 (和田) 5

- 1 調査成果の概要 5
- 2 古墳時代以外の採集遺物 6
- 3 亀塚古墳の調査 6

第3章 総 括 (鈴木) 13

- 1 亀塚古墳築造の意義 13
- 2 今後の展望 16

附編 浜松市の前方後円(方)墳集成 (川西・和田) 17

図 版

報告書抄録

第1章 序論

1 調査の概要

遺跡の概要 亀塚古墳は、静岡県浜松市の西区呉松町に所在する前方後円墳である。『静岡県の前方後円墳』では、全長 21 m とされている（静岡県教委 2001）。浜名湖に突出する庄内半島の根元部分にあたり、浜名湖東岸から東の各所へ向かう陸上交通の要衝に築造されたとみられる。発掘調査は行われていないが、須恵器や円筒埴輪、人物埴輪の破片が採集されている。採集遺物の特徴から古墳時代後期（6世紀前葉：MT15～TK10型式期）に築造された古墳と捉えられている。

調査の経緯 亀塚古墳は西区で唯一、埴輪が伴い墳丘が遺る前方後円墳で、浜名湖東岸地域の古墳時代を考える上で貴重な遺跡である。しかし、墳丘測量調査などの本格的な墳丘に対する調査は行われておらず、詳細な調査の機会が待たれていた。2013年2月と2014年7月に現地確認を行い、墳丘の崩落や地形改変が認められた。その際、埴輪や須恵器が表面採集されたため、採集資料の報告を行った（和田 2016）。その後、亀塚古墳の保護・活用に向け、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）では、土地所有者の承諾を得て、亀塚古墳の基礎的な情報を得るために、測量調査を実施した。測量調査は、平成30年（2018）2月19日・20日の2日間で実施した。

調査の方法と経過 測量にあたっては、基準点・水準点を任意の2点に設定し、世界測地系に即した座標値と標高値を求めた。基準点および水準点の設定は、浜松市文化財課の委託を受けた株式会社フジヤマが実施した。また、現状から復元した主軸上に2点の基準点を設定し、世界測地系に即した座標を付した。墳丘測量はオートレベルを用いて標高 0.2m 間隔で等高線を求め、トータルステーションを用いて平面的な位置を記録した。現況写真は、6×7判カメラを用い、カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタル一眼レフカメラを併用して撮影した。なお、平成31年（2019）2月17日には現地見学会を行い、130人が参加した。

整理作業等 調査終了後は、浜松市北区引佐町井伊谷に所在する浜松市地域遺産センターにおいて墳丘測量図の作成や採集資料の洗浄・抽出・図化を行った。整理作業の成果をもとに、原稿の執筆と編集を行い、報告書を刊行した。

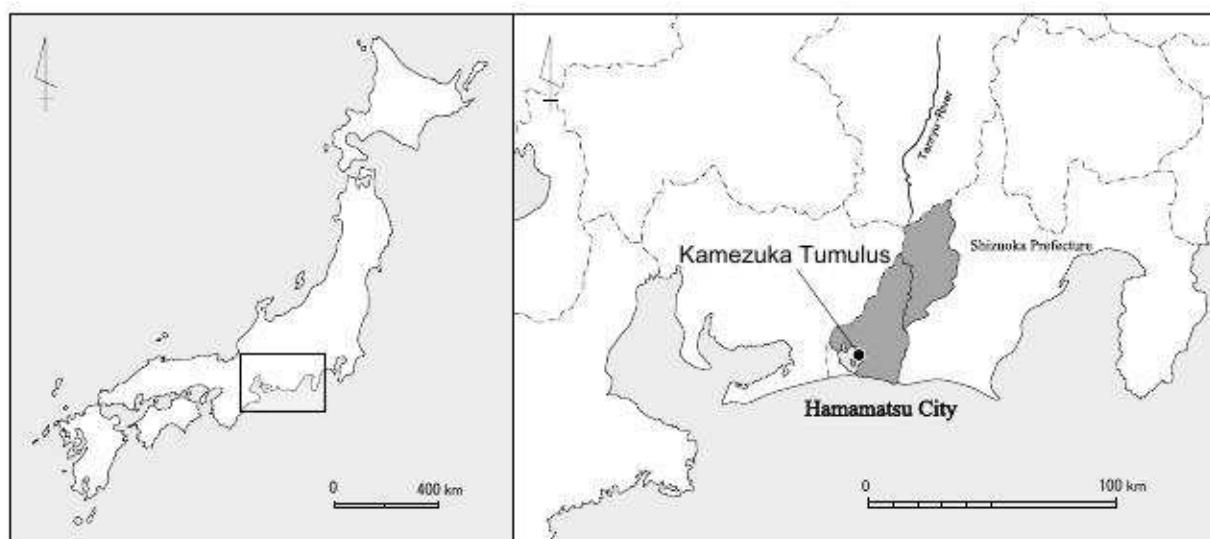


Fig.1 亀塚古墳の位置

2 亀塚古墳をめぐる環境

(1) 地理的環境

亀塚古墳は、浜松市西区呉松町に単独で所在する前方後円墳で、浜名湖へと突出する庄内半島の根本部分にある。庄内半島の南や西に浜名湖、北に浜名湖の支湖である引佐細江が広がる。明治時代の地図（日本帝国陸軍陸地測量部作成の地図）からは、庄内半島の島端や浜名湖、内浦などの各所と繋がる陸上交通路の交点が亀塚古墳の周辺に集中する様子を読み取ることができる。なかでも、庄内半島から三方原台地を経て細江町や都田町へと繋がる主要道が亀塚古墳の南側隣接地を通り、陸上交通の要所であることがうかがえる。浜名湖を利用した水上交通と陸上交通の要所に亀塚古墳が構築されたといえる。



Fig.2 亀塚古墳とその周辺の古墳

(2) 歴史的環境

縄文時代・弥生時代 亀塚古墳とその周辺では、縄文時代・弥生時代の遺跡は調査事例が乏しく、様相は明らかではないが、遺物の散布が確認されており、人々の生活・活動の空間であったことがうかがえる。

古墳時代 古墳時代の亀塚古墳とその周辺の様相は、古墳の築造状況からうかがい知ることができる。亀塚古墳が築造された小地域には、先行する古墳がみられず、地域において最も古い古墳である。比較的近接する都田川流域における古墳の動向を通して亀塚古墳出現までの地域情勢を概観する。都田川流域で最も古い首長墓は、北区細江町の陣座ヶ谷墳丘墓である（浜松市教委 2019）。前期前半（4世紀前葉）には、井伊谷盆地を臨む丘陵上に全長 49.5m の前方後方墳である北岡大塚古墳（北区引佐町）が築造され、全長 47.5m の前方後円墳である馬場平古墳、直径 36m の円墳である谷津古墳が連続して築造される。浜名湖沿岸部では、中期中葉に一辺 22m の方墳である狐塚古墳が築造される。狐塚古墳は、副葬品の構成や立地環境から浜名湖を通じた海上交通網と浜名湖北岸の陸上交通網を掌握した被葬者像が想定されている（鈴木一 2015）。狐塚古墳の築造後、浜名湖東岸地域では北島1・2号墳や尾張系埴輪を有する中平古墳が築造される。中期後葉になると、中川平野を臨む丘陵上に築造された全長 55m の前方後円墳である陣座ヶ谷古墳（北区細江町）が築造される。陣座ヶ谷古墳には、埴輪が樹立されている。この陣座ヶ谷古墳の築造を最後に 50m 級の首長墓の築造はみられなくなる。かわりに、郷ヶ平3・4・6号墳に代表されるように、20m 級の前方後円墳と埴輪の組み合わせが、小地域を治める首長墓の一般的な形態として普及する。

亀塚古墳は、都田川流域に築造された全長 20m 級の前方後円墳と同様の時期に同じ規則性をもって構築された前方後円墳である。亀塚古墳の築造後、6世紀後葉から7世紀初頭を中心とした時に火穴古墳が構築された。火穴古墳は直径 22m の円墳とされ、墳丘の内部には大型の石材を多用した畿内系両袖型石室が構築されている（浜松市教委 1995）。火穴古墳は、市有地化されるとともに昭和 63 年（1988）に浜松市の史跡に指定され、保護されている。火穴古墳の周囲には 5 基の古墳があったと伝わり、深萩古墳群と総称される。火穴古墳築造以降、亀塚古墳の北に位置する根本山に根本山古墳群が造営された。根本山古墳群は、7世紀にかけて 150 基を超える古墳が築造されている（静岡県 1930・浜文協 1988）。亀塚古墳や群集墳を造営した集団が継続的に亀塚古墳とその周辺に所在したことを見出している。しかし、亀塚古墳や火穴古墳、根本山古墳群などの被葬者や造営集団の所在がうかがえるような集落遺跡は確認できておりらず、地域史を明らかにする上で課題といえる。

古代以降 古代の亀塚古墳とその周辺は、遠江国敷知郡和地郷もしくはその周辺にあたると捉えられる。古代の遺跡の状況は不明な点が多いが、亀塚古墳の西 800m に所在する曾許乃御立神社が注目できる。曾許乃御立神社は、式内社敷知郡六座の一つに比定され（荒木・原 1994）、『日本三代実録』には、貞觀4年（862）、正六位上の神階を保有した曾許乃御立神社へ從五位下の神階が授与されたことが記されている（荒木 1994）。『曾許乃御立神社文書』には、江戸時代には3代將軍徳川家光をはじめ、歴代の征夷大將軍から 10 石の寄進を受けた記録が残る（静岡県 1946）。内山真龍が著した『遠江国風土記伝』によると、近世の曾許乃御立神社は、館山社鹿島大明神の名で知られ、庄内半島や和地・佐浜・伊左地等 15 ヶ村から信仰を集めたとされる（内山 1799）。明治2年（1869）に神祇官の許可を得て、曾許乃御立神社と号し（小杉 1988）、現在に至る。曾許乃御立神社は、名称の変更があるものの、建立以降、継続的に地位の信仰を集めたことをうかがい知ることができる。また、根本山の西側に

位置する大草山の山麓では、瓦塔の破片が採集されている。亀塚古墳の隣接地から渥美窯産の壺が出土しており(Fig.6)、中世の墓地もしくは経塚が展開していた可能性が高い。亀塚古墳の周辺には、信仰に関わる空間が存在したことがうかがえる。

(3) 亀塚古墳をめぐる調査・研究等の履歴

亀塚古墳は、浜松市西区唯一の墳丘が残る前方後円墳で、庄内郷土史研究会により、墳丘の規模や築造時期、名称の由来等が紹介され(庄内郷土史研究会 1972)、刊行当時の亀塚古墳に対する認識がまとめられている。

昭和 56 年(1981)に亀塚古墳の隣接地で行われた農地整備の際(Fig.3・4)に、埴輪や須恵器が地表に現われた。この際に採集された遺物が、浜松市博物館において収蔵・保管してきた。この採集資料は、主に前方部南側・西側を中心に採集されたもので、残存状態が比較的良好なものが多い。鈴木敏則氏は、この採集資料を整理し、淡輪技法を用いた埴輪であることや 2 次調整が省略されるものが多いことを指摘し、同時に採集された須恵器の特徴から、TK10 型式併行期のものと位置付けた(鈴木敏 1990)。

亀塚古墳の遺物は、今日、遠江地域における古墳時代の地域研究を行う上で欠かせない資料として認識されている。

浜松市文化財課では 2013 年と 2014 年に行つた現状確認時に表面採集した埴輪と須恵器を整理し報告するとともに、亀塚古墳の保護に向け、墳丘測量などの基礎的な調査の必要性を示した(和田 2016)。



Fig.3 1981 年の亀塚古墳 (南西から)

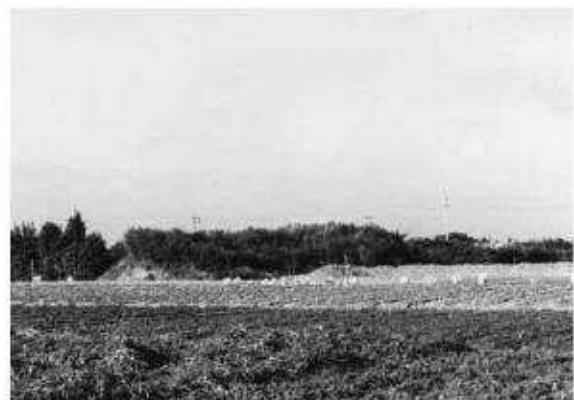


Fig.4 1981 年の亀塚古墳 (南東から)

参考・引用文献

- 荒木敏夫 1994「第 4 章 文化の成熟と文芸の世界 第 1 節 神社の祀りと神々の序列化」『静岡県史通史編 1 原始・古代』
荒木敏夫・原秀三郎 1994「式内社考証集覽」『静岡県史通史編 1 原始・古代』
内山真龍 1799『遠江国風土記伝』(1935 刊本: 谷島屋書店、1980 復刻: 世界聖典刊行協会)
小杉達 1988「曾許乃御立神社」『式内社踏査報告』第 9 卷 東海道 4 式内社研究会
静岡県 1930『静岡県史』
静岡県 1946『静岡県史料』第 5 輯
静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳』
庄内郷土史研究会 1972『庄内の歴史』
鈴木敏則 1990「遠江の淡輪系円筒埴輪」『転機』3 号
鈴木一有 2015「第 4 章 後論 3 狐塚古墳築造の意義」『狐塚古墳』浜松市教育委員会
浜松市教育委員会 1995「火穴古墳」『浜松市指定文化財 古墳 石室が見学できる古墳』
(財) 浜松市文化協会 1988『根本山古墳群 II』
(財) 浜松市文化振興財団 2013『郷ヶ平古墳群』
山中美歩 2019「陣座ヶ谷古墳群 1 次調査報告」『平成 29 年度 浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会
和田達也 2016「亀塚古墳の採集遺物」『平成 26 年度 浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会

第2章 調査成果

1 調査成果の概要

後円部の南側から東側にかけての部分や前方部南西隅角部は顕著な後世の地形改変が認められるものの、墳丘測量の結果、亀塚古墳は全長約24m、残存墳丘高2.2mの前方後円墳であることが判明した。また、浜松市博物館に収蔵されていた亀塚古墳の採集資料の再整理とともに2018年10月までに行われた現状確認等や測量調査により表面採集された須恵器や埴輪について整理を行った。出土遺物の時期はこれまでに指摘されてきたように、TK10型式期を中心とした時期（6世紀前葉）に築造された古墳である蓋然性が高いことが追認できた。この過程で、博物館収蔵資料の多くが、採集時の現場の状況などから、亀塚古墳の前方部南側および西側で採集されたものであることが明らかになった。

亀塚古墳の周囲から多数のカメが出土したことが知られ、亀塚古墳の呼称の一因とされている。亀塚古墳の隣接地から出土した鎌倉時代の壺が土地所有者により保管されており、経塚や中世墓が展開したことが推定できる。今回の測量調査時に、所有者より出土当時の状況や経緯についてご教示いただいた。また、所有者の協力を得て、資料化を行った。出土から現在に至る経緯は、亀塚古墳とその周辺の中世史や現代史を考えるうえで非常に有益な情報であり、実測図と合わせて報告する。このほか、墳丘測量時に、墳丘上に構築された現代の小石集積の中から、打製石斧を採集した。亀塚古墳とその周辺に縄文時代の遺跡が展開する可能性を示す遺物として注目できる。



2 古墳時代以外の採集遺物

(1) 縄文時代の遺物

石 器 縄文時代の打製石斧 1 点を墳丘上に設けられた現代の小石集積の中から採集した。1は、緑色片岩製の打製石斧で全長 14.3cm、最大幅 4.4cm、最大厚 2.1cm、重さ 173 g である。刃部は一部が欠損している。

(2) 鎌倉時代の遺物

発見から資料化に至る経緯 亀塚古墳の墳丘の北側隣接地 (Fig.7) において昭和 50 年代後半に行われた農地整備の際に、渥美窯産の壺が 1 点掘り出され、土地所有者によって現在まで保管してきた。今回の測量調査に合わせ、所有者のご協力を得て、浜松市教育委員会が図化および写真撮影などを行い資料化を行った。

陶 器 2 は、渥美窯産の小型壺であり、口縁部が欠損しているが、破断面が平滑に整えられている。口縁部が欠損した状態で埋納された可能性が高い。肩部には刻書がみられる。くびれ部径 6.5cm、最大径 17.8cm、底径 8.6cm、残存高 19.0cm である。器形から 13 世紀を中心とした時期のものと捉えられる。

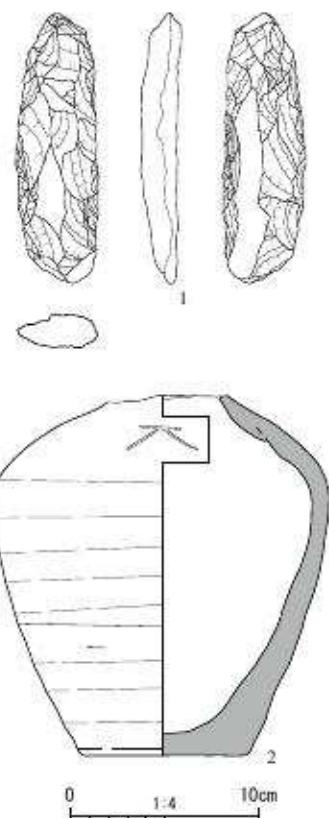


Fig.6 古墳構築以前と古墳構築以後の遺物

3 亀塚古墳の調査

(1) 測量調査

現 状 亀塚古墳は現在、四方を耕作地に囲まれている。耕作地と墳丘は最大で 2.2m ほどの比高差が確認できる。墳丘の周囲には周溝がめぐらされていたと想定できるが、耕作地として平らに

造成されており、明らかでない。墳丘周辺は全体的に標高 38.0m 程度であり、墳丘は盛土により形成されたと捉えられる。墳丘は、西に前方部、東に後円部を配置する状況が認識でき、現況の形態からでも全長 20 m 級の前方後円墳と判断できる状態である。しかし、墳丘上には植樹や現代の小石集積がみられるほか、前方部西辺から前方部南辺にも広範囲にわたり小石集積が認められる。後円部の南側から墳丘北側一帯にかけては墳丘の切削がみられる。後円部北側墳丘斜面の中位には後世に造成された最大幅 1.5m 程度の平坦面がみられ、その平坦部と墳裾部や墳頂部を結ぶ通路が設けられている。南側くびれ部には前方部頂部にと墳裾部を結ぶ通路が認められるほか、墳丘を掘削して構築した一辺約 1.7m の焼却穴がみられるなど、現代の地形改変が顕著な状況である。

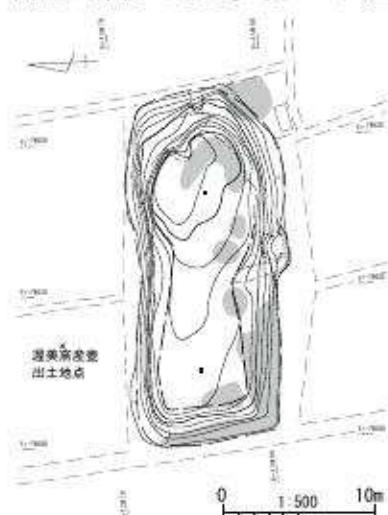


Fig.7 亀塚古墳の現況

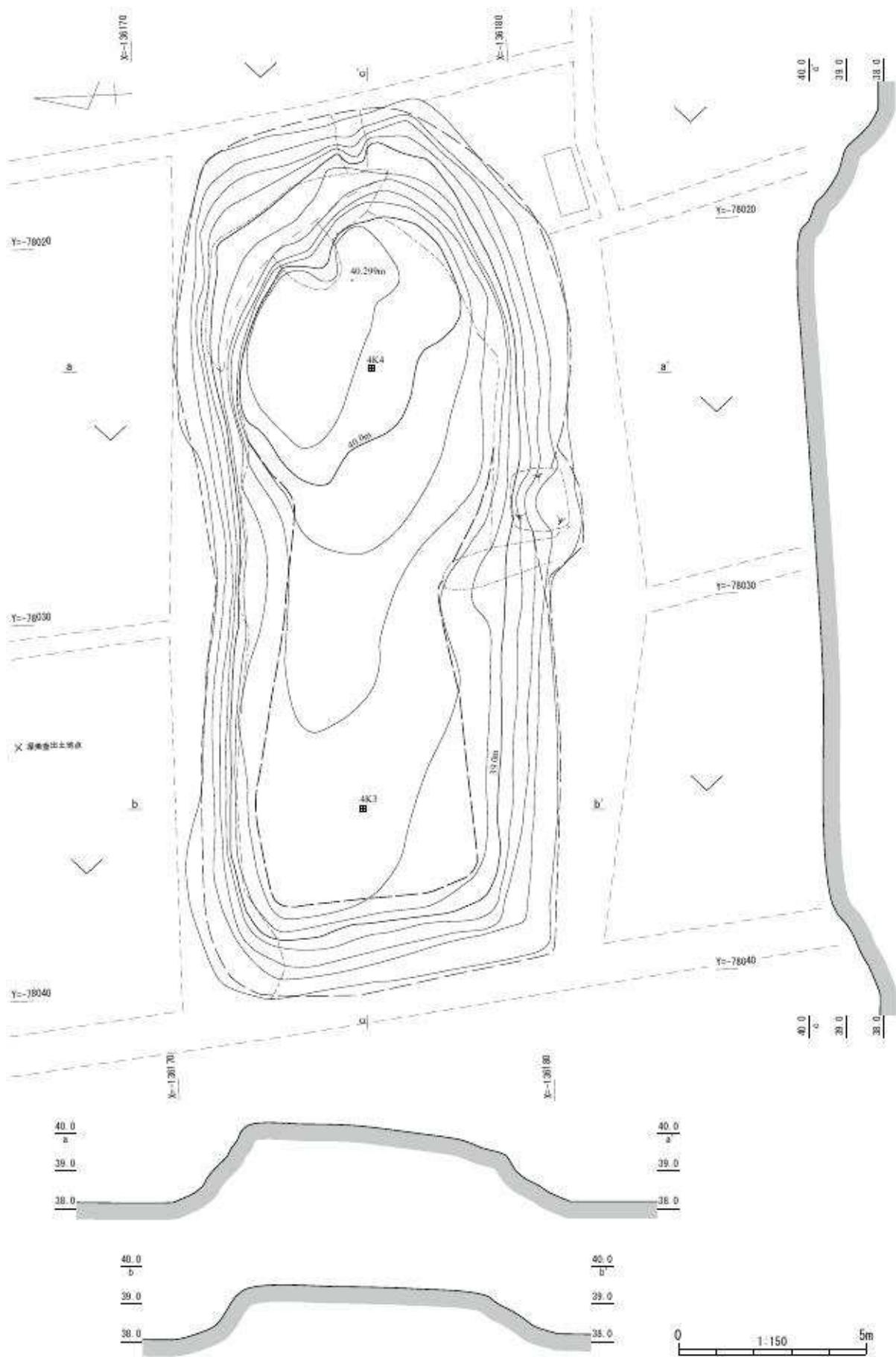


Fig.8 龟塚古墳墳丘測量図

測量成果 亀塚古墳は、墳丘裾部を中心に後世の地形改変が顕著であるが、墳丘上は比較的残存状態が良好であり、前方後円墳の特徴を認識することができる。現況で全長は23.6m、後円部径は東西13.8m、残存墳丘高は後円部で最大2.2m、前方部で最大1.4mである。墳丘頂部は前方部・後円部ともに良好に残存している状態が確認でき、埋葬施設が盗掘等の改変を受けた可能性を想定できる地形の変状は認められなかった。また、埋葬施設の開口部や石室石材などは確認できないことから、木棺直葬と想定できる。

(2) 遺物の採集状況

浜松市博物館収蔵資料 浜松市博物館に収蔵されている亀塚古墳の採集遺物は、昭和56年(1981)に亀塚古墳の隣接地で行われた農地整備に伴い、地形改変が及んだ墳丘の周辺で採集されたものである。この時の採集資料は、「遠江の淡輪系円筒埴輪」において紹介された(鈴木敏1990)。図化・掲載された埴輪や須恵器の多くは、前方部南側や前方部西側において採集したものである。人物埴輪の腕は、前方部南側において採集されたものである。

現状確認や測量調査時の採集遺物 2015年以降、度々現状確認が行われ、その都度、地表に散布した遺物が採集されてきた。また、平成30年(2018)に実施した墳丘測量調査時には、須恵器や埴輪を墳裾部や墳丘に構築された現代の小石集積などで採集した。いずれの採集遺物も多くが小片である。採集埴輪の表面は、摩滅が進行したものが多い。Fig.10-27に図示した朝顔形埴輪は、2018年の墳丘測量時に北側くびれ部の現況の墳丘裾部付近において採集したものである。

(3) 須恵器 (Fig.9)

概要 須恵器はいずれも小片であるが、時期的な特徴や器種が明らかなものを対象に12点を図示した。確認できた器種は壺蓋4点、蓋壺身4点、高壺2点、瓶類1点、壺甕類1点である。過去の報告資料と本稿の実測図掲載遺物の対応関係は遺物観察表に示した。

蓋 壺 3～6は蓋壺蓋である。いずれも小片であるが、最大径はおおむね15cmに復元できる。7～10は蓋壺身である。7～9は受け部径が約15cmに復元できる。10は受け部径が14cmに復元できる。蓋壺蓋(4)と蓋壺身(7)は、胎土や調整、焼成具合などが類似しており、生産時から組み合わせの関係であった可能性がある。

高 壺 11・12は高壺である。11は高壺の壺部片である。内面と外面の焼き具合から有蓋高壺の可能性が高い。12は、無蓋高壺である。口縁部と底部の境界部分には6歯以上の櫛状工具を用いた波状文が施されている。外面は黒色に焼き上がり光沢をもち、壺部内面には降灰がみられる。

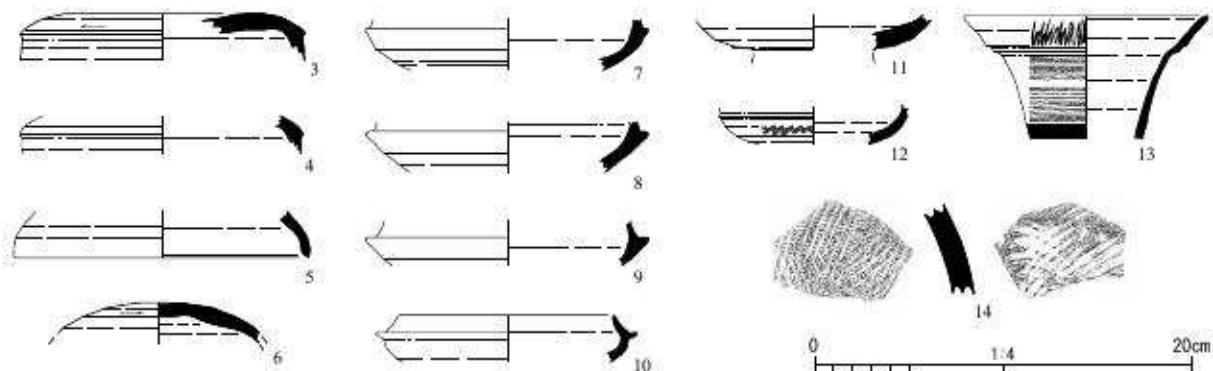


Fig.9 亀塚古墳採集須恵器

瓶類 13は瓶類で、形態から頸の口縁部とみられる。口径は約13cmに復元でき、口縁部外面と頸部外面に櫛描き波状文がみられる。口縁部は3歯以上の櫛状工具、頸部は26歯以上の工具を用いており、2つの工具を用いて施文されたといえる。

壺・甕類 14は壺もしくは甕の体部片である。同一個体とみられる体部の破片が数多く採集されており、もっとも情報を多く残したものを見た。外面には平行線文タタキ具痕跡とタタキ具痕の上にカキメがみられる。内面には同心円文のアテ具痕跡がみられる。

(4) 増輪 (Fig.10)

概要 増輪はいずれも小片であり、摩滅が顕著なものが多いが、円筒増輪や朝顔形増輪、人物増輪がある。器財増輪とみられるものはない。器種や製作技法、突帯、口縁部、基底部、透孔などの特徴を有する破片を抽出し、14点を図示した。過去の報告資料と本稿の実測図掲載遺物の対応関係は遺物観察表にまとめた。

円筒増輪 全形をうかがえる円筒増輪ではなく、段構成は不明である。円筒増輪は、口径が復元が可能なものの、体部片は突帯と透孔の両方が残存し、器形の復元が可能なものを中心に図示した。15・16は円筒増輪の口縁部で、口径は30cm程度に復元できる。外面はナデ調整であり、内面はヨコハケがみられる。17～22は円筒増輪もしくは朝顔形増輪の胴部を示した突帯と透孔が伴う破片を抽出し図化した。突帯部の直径は28～30cm程度に復元ができる。突帯の断面形状は台形のもの(17～19)とややM字状のもの(20・21)がある。透孔は円形であり、直径は5～8cm程に復元できる。外面はナデ調整のみのものが多く見られる。また、22はハケ目が認識できる数少ない破片のなかで唯一、直径が復元できるものであったため図示した。明確に円筒増輪との判断できる破片の中にハケ目を認識できるものは少なく、朝顔形増輪や形象増輪の可能性もある。23から26は基底部である。23～25は、底径25cm程度に復元でき、上部に向かってやや外形するものもしくは直立する特徴をもつ。内面には紐積み痕跡が明瞭に確認できる。23の外面にはわずかにタテハケがみられる。26は底部から上部に向かって内傾する特徴をもつ。底径は23cmである。内外面ともにオサエやナデ調整がみられるが、ハケメ調整は施されておらず、粘土紐積み痕跡が明瞭に認識できる。粘土紐積み痕跡の幅は約2～3cmである。淡輪系の形象増輪の基底部は、底部から上部に向かって内傾する傾向があり、26は形象増輪の基底部である可能性があるが、亀塚古墳においてその傾向があるか否かは不明なため、円筒増輪の基底部として報告する。基底部の端部にはいずれの個体にも淡輪技法の特徴である底部設定技法に起因する段がみられる。円筒増輪の表面色調は橙色が主体であり、19のように灰色のものが少量含まれている。断面色調は灰色から灰黄褐色である。

朝顔形増輪 朝顔形増輪を27～30に示した。肩部もしくは括れ部など朝顔形増輪と認識できるもののみを朝顔形増輪として示した。全形をうかがえるものがないため明らかではないが、体部は、円筒増輪と共にしているとみられる。朝顔形増輪の肩部はなで肩で、くびれ部に設けられた突帯は、断面が三角形である。30は角度から朝顔形増輪の肩部として図化したが、直径6.0cmの円形透孔が伴い、形象増輪の基底部の可能性もある。

不明形象増輪 31は摘み出した小規模な突帯を持つ小破片である。円筒増輪の突帯とは異なる形態であり、人物増輪などの形象増輪に伴うもの可能性がある。

人物増輪 32と33は人物増輪の腕である。32は指先から腕の付け根部分までが残存している。33は、腕の先端部で先端には剥離痕跡がある。何らかの器物を捧げ持った形態であった可能性がある。いずれの腕も胴体から前方へ腕を差し出しているものと推定できる。

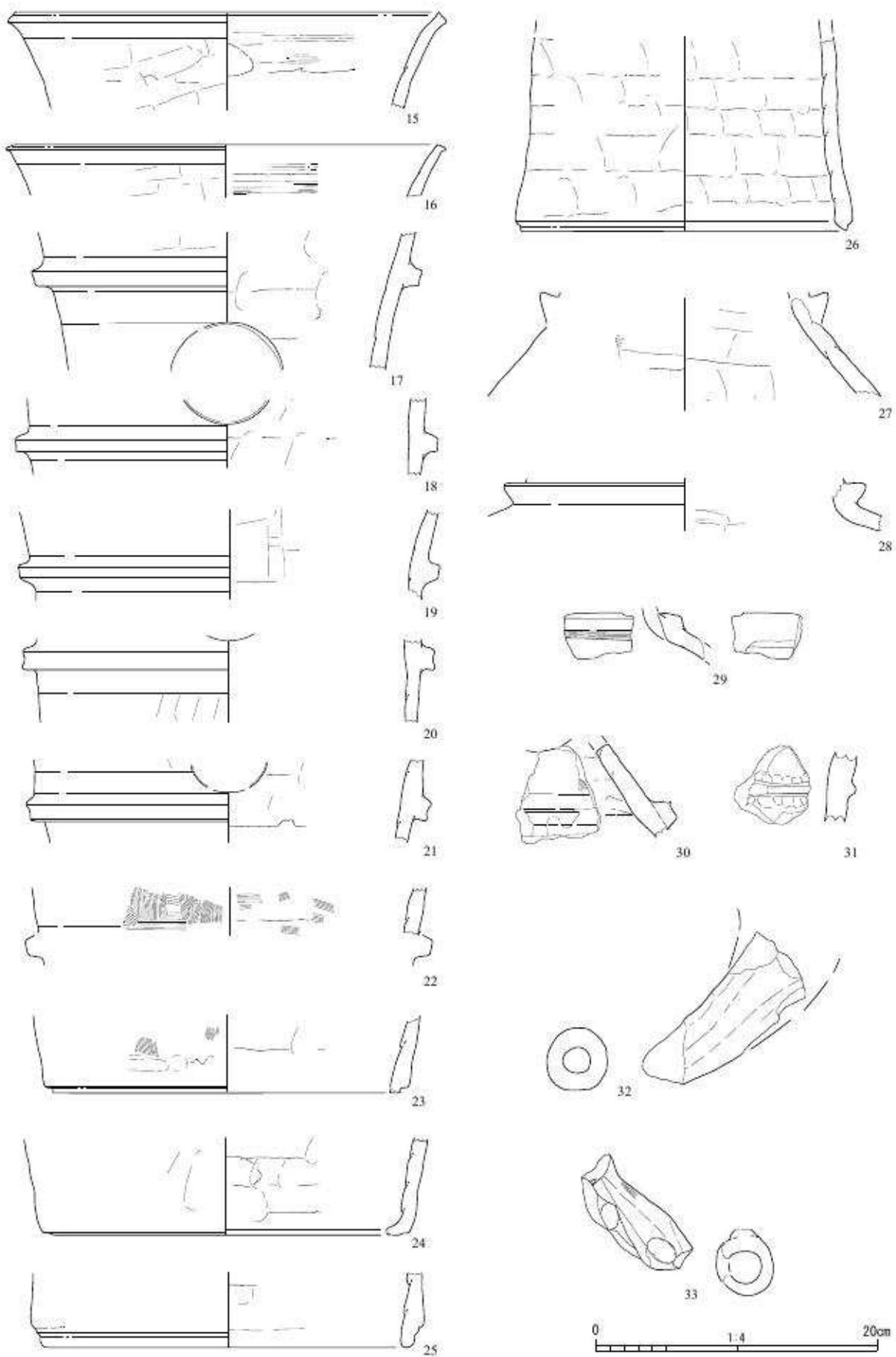


Fig.10 龜塚古墳採集埴輪

(5) 小 結

古墳の規模と構造 2018年に実施した墳丘測量調査により、亀塚古墳は、前方後円墳であることが確認できた。測量図をもとに復元できる墳丘の規模は、全長24.0m、後円部直径14.6m、残存高2.2mである。現況では、段築の有無を判断する根拠になりうる墳丘斜面の傾斜変換点は認識できない。しかし、後円部東側から後円部北側にかけて認められる最大幅1.5mほどの平坦部が、古墳の中段平坦面を利用して造成された可能性は否定できない。また、1965年に撮影された航空社写真には、南側くびれ部を中心に墳丘斜面に段がみられる点や同時期・同規模の郷ヶ平4号墳(浜文振2006)が二段築成であることから、二段築成の可能性がある。墳丘の周間にめぐらされた周溝は、農地として平坦に改変

されているため、地形測量や現況地表の観察では周溝の痕跡は認識できず、課題といえる。

須恵器 亀塚古墳でこれまでに採集された器種は、蓋坏身・蓋坏蓋・有蓋高坏・無蓋高坏・甌・壺甌類がある。須恵器の生産時期は、TK10型式のものが主体であるが、MT15型式の特徴をもつものが少量みられる。

埴 輪 墳輪は、円筒埴輪と朝顔形埴輪、形象埴輪がある。円筒埴輪は、基底部に底部設定技法に起因する段を持つ淡輪系埴輪である。埴輪はいずれも窯焼成で表面が橙色や浅黄橙色に焼きあげられたものが多く、少量、灰色に焼きあがったものがみられる。全形をうかがい知ることができる資料はなく、突帯間隔が分かる資料もないため、円筒埴輪の段構成は明らかにできない。口径は約30cm、突帯の最大径は約30cm、底径は約25cmに復元できるものが主体である。透孔はいずれも円形で、直徑は7cm程度のものが主体である。突帯の断面形状は台形のものとやや強く台形の上辺が凹むものがある。調整は、ナデ調整のものを主体としている。口縁部内面にはヨコハケがみられるが、体部内面は粘土紐積み痕跡を残すものが主体である。外面の2次調整が施されたものは少ないが、ヨコハケを施すものが少量みられる。1段目に無調整のものがあり、新しい要素を持つ。

形象埴輪は人物埴輪の腕がある。採集位置から人物埴輪は前方部南辺に立て置かれたものと推定できる。

築造時期 須恵器はMT15型式の特徴をもつものを少量含むが、TK10型式のものが主体である。また、埴輪は、窯焼成であり、1段目無調整等の特徴も須恵器の併行関係と整合的である。亀塚古墳の築造時期は、TK10型式（6世紀前葉）を中心とした時期と捉えられる。

引用文献

- 鈴木敏則 1990「遠江の淡輪系円筒埴輪」『転機3号』転機刊行会
(財)浜松市文化振興財団 2006『郷ヶ平4号墳II』

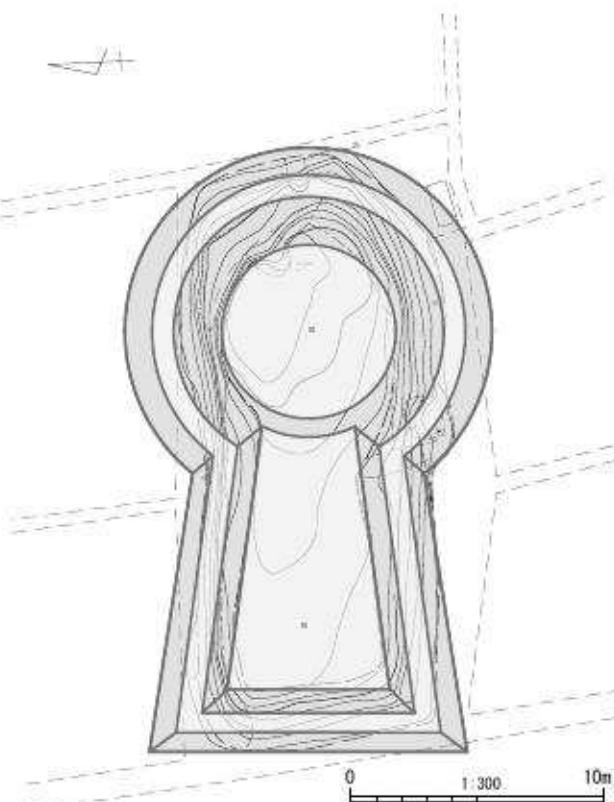


Fig.11 亀塚古墳墳丘復元図

Tab.1 龜塚古墳主要採集遺物観察表

Fig.	No.	採集状況等	種別	細別	残存率	反転等	口径	器径	底径	器高	色調		備考	過去の掲載番号
											表面	断面		
6	1	2018a	石器	打製石斧	95		4.4	14.3		2.1			重朱 173g 緑色片岩 文びれ底径 6.8cm 身寄「#」	—
6	2	2018b	陶器	小型壺	90				17.8	8.6	灰	灰白		—
9	3	2014	須恵器	蓋坏蓋	5	反	(15.0)				灰	灰		浜教委 2016 第 2 図 - 1
9	4	1981	須恵器	蓋坏蓋	5	反	(15.0)				灰	灰		鈴木敏 1990 第 13 図 - 25
9	5	1981	須恵器	蓋坏蓋	5	反	(15.8)				灰白	灰白		鈴木敏 1990 第 13 図 - 26
9	6	2013	須恵器	蓋坏蓋	5	反					灰	灰		浜教委 2016 第 2 図 - 2
9	7	1981	須恵器	蓋坏身	5	反	(15.0)				灰	灰		鈴木敏 1990 第 13 図 - 28
9	8	1981	須恵器	蓋坏身	5	反	(15.0)				灰	灰		—
9	9	1981	須恵器	蓋坏身	5	反	(15.0)				灰	灰		鈴木敏 1990 第 13 図 - 27
9	10	2018a	須恵器	蓋坏身	5	反	(13.8)				灰	紫褐		—
9	11	2013	須恵器	有蓋高壺	5	反					灰	灰		浜教委 2016 第 2 図 - 3
9	12	1981	須恵器	無蓋高壺	5	反					黒	灰白	波状文原体・6 本以上	鈴木敏 1990 第 13 図 - 30
9	13	1981	須恵器	ハソウ	5	反・合	13.0				黒	紫褐	口縁部波状文原体・3 個以上 脚部波状文原体・26 個以上 外：平行綫文テクニカル模 内：同心円文アケ直線	鈴木敏 1990 第 13 図 - 29
9	14	2013	須恵器	壺甕類	5						灰	灰白		浜教委 2016 第 2 図 - 4
10	15	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(30.0)	(31.2)			橙	灰黄褐	内：ヨコハケ：6 本/cm	鈴木敏 1990 第 13 図 - 1
10	16	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(30.0)	(31.2)			橙	橙	内：ヨコハケ：9 本/cm	鈴木敏 1990 第 13 図 - 2
10	17	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(27.8)				橙	灰黄褐	円形透孔直径 8.0cm	鈴木敏 1990 第 13 図 - 17
10	18	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(30.0)				橙	灰黄褐	円形透孔直径 7.5cm	鈴木敏 1990 第 13 国 - 12
10	19	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(30.0)				灰	橙	内：イタナゲ	鈴木敏 1990 第 13 国 - 20
10	20	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(29.4)				橙	淡黄褐	円形透孔直径 7.0cm	鈴木敏 1990 第 13 国 - 13
10	21	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反	(28.8)				橙	淡黄褐	円形透孔直径 5.4cm	鈴木敏 1990 第 13 国 - 14
10	22	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反					橙	淡黄褐	2 次調整ヨコハケ：6 本/cm →タツハケ：9 本/cm	鈴木敏 1990 第 13 国 - 8
10	23	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反		(24.8)			橙	灰黄褐	外：タツハケ：9-10 本/cm	鈴木敏 1990 第 13 国 - 22
10	24	1981	埴輪	円筒埴輪	5	反			(24.6)		橙	灰黄褐		鈴木敏 1990 第 13 国 - 23
10	25	2018c	埴輪	円筒埴輪	5	反			(25.8)		橙	灰黄褐		—
10	26	1981	埴輪	円筒埴輪	20				23.2		橙	灰黄褐		鈴木敏 1990 第 13 国 - 24
10	27	2018c	埴輪	朝顔形埴輪	5	反					橙	灰黄褐		—
10	28	1981	埴輪	朝顔形埴輪	5	反					橙	灰黄褐		—
10	29	1981	埴輪	朝顔形埴輪	5						橙	灰黄褐		鈴木敏 1990 第 13 国 - 7
10	30	2014	埴輪	朝顔形埴輪	5						灰黄褐	灰黄		浜教委 2016 第 2 国 - 7
10	31	2014	埴輪	形象埴輪	5						橙	淡黄褐		浜教委 2016 第 2 国 - 6
10	32	1981	埴輪	人物埴輪	5						橙	灰黄		—
10	33	1981	埴輪	人物埴輪	5						橙	灰黄褐		—

凡例

「採集状況等」 数字は採集等の年次を示す

1981 は、前方部西側から前方部南側で採集した資料であることを示す

2018a は埴丘上の石塚内から採集した資料であることを示す

2018b は昭和 50 年代後半に出土した資料で、2018 年に所有者の協力を得て資料化したものであることを示す

2018c は北側くびれ部で採集した資料であることを示す

「残存率」 全体における残存している割合を % (10% 未満のものを「5」と示す)

残存率 10% 未満のものを「5」と示す

「反転等」 「反」 反転して図化したもの

「合」 合成して図化したもの

大きさの単位は「cm」

口径、器径、底径の () 内の値は、推定した復元値であることを示す

石器は「全長」を「器径」、「幅」を「口径」、「厚さ」を「器高」にそれぞれ読み替えて示す

ハケメの本数は 1cm 中にある条数を示す

「色調」 のうち、「表面」は外面色調、「断面」は破断面中心部の色調を示す

「過去の掲載番号」 の文献

鈴木敏則 1990 「遠江の淡輪系円筒埴輪」『伝機 3 号』転載刊行会

浜松市教育委員会 2016 「亀塚古墳の採集遺物」『平成 26 年度 浜松市文化財調査報告』

第3章 総括

1 亀塚古墳築造の意義

今回実施した測量調査によって、亀塚古墳は全長 24.0 m の前方後円墳であることが想定できるようになった。また、従前から採集されていた埴輪や須恵器を再検討し、その築造時期は 6 世紀前葉（TK10 型式期）であることを追認した。以下、調査で明らかになった情報をもとに、亀塚古墳築造の意義について触れておきたい。

淡輪系埴輪の推移 亀塚古墳から出土した埴輪は、底部に段状の痕跡をもつ淡輪系埴輪である。遠江における淡輪系埴輪については、鈴木敏則氏による一連の論考（鈴木敏 1990, 1994, 2003）に加え、筆者もその変遷について、研究史とその推移について一定の見通しを示している（鈴木一 2012, 2018, 2019）。遠江における淡輪系円筒埴輪は、形態的特徴や調整技法の違いから淡輪系 I 類と II 類に分類できる。I 類は 1 次調整がナデで仕上げられるものであり、II 類は 1 次調整にハケもしくはハケと関連が高い工具を用いるものである。淡輪系 I 類は、外面ヨコハケと通有の突帯をもつ I a 類、外面ヨコハケで突帯上にもヨコハケを入れる I b 類、外面をナデ調整する I c 類に分けることができる。いっぽう、淡輪系 II 類は最下段にヨコハケを有する II a 類、最下段にヨコハケを施さない II b 類、外面調整全体のハケの省略傾向が強い II c 類に分けることができる。亀塚古墳例は、このうちの II c 類に位置づけられる。現状では、三遠地域における淡輪系 II c 類に分類できるのは亀塚古墳例のみである。亀塚古墳から採集された須恵器には時期的に新しい傾向がみられるところから、淡輪系 II c 類は、当地域の淡輪系埴輪の中でも最新相に位置づけて問題はないだろう。

三遠地域における淡輪系埴輪の出現は、千人塚古墳例にみると、5 世紀前葉（TK73 型式期～TK216 型式期）である。いっぽう、その終焉の時期は、亀塚古墳例にみると 6 世紀前葉（TK10 型式期）であり、その存続時期は比較的長い。

他系統埴輪との並行関係 亀塚古墳が構築された 6 世紀前葉の遠江地域には、尾張系埴輪が広く採用されている。尾張系埴輪とは、須恵器焼成技法との関係が最も高い埴輪の一群で、1 次調整はタテハケ、2 次調整は C 種ヨコハケを主体とする。タタキ技法、倒立技法、底部内面のケズリ調整などの諸属性も顕著に認められ、その出現時期は MT15 型式期に求められる。淡輪系埴輪から尾張系埴輪への推移が明確にあとづけられるのは、郷ヶ平古墳群である。この古墳群では、MT15 型式期の築造とみられる郷ヶ平 6 号墳の築造をもって、淡輪系埴輪から尾張系埴輪に転換している。亀塚古墳にみられる淡輪技法の最終末の時期を TK10 型式期とみると、尾張系埴輪との一定期間の並行関係を認めることができるだろう（註 1）。

また、亀塚古墳が構築された 6 世紀前葉の遠江には、淡輪系埴輪や尾張系埴輪に属さない別系統の埴輪も数多くみられる。遠江における淡輪系埴輪の最盛期は 5 世紀であり、6 世紀初頭以降、淡輪系埴輪の生産は急速に衰退すると評価してよい。6 世紀初頭の淡輪系埴輪は豊田市江古山 3 号墳や、岡崎市古村積神社古墳、湖西市岬場窯など、三河から浜名湖西岸地域に収斂する傾向がある。亀塚古墳に淡輪系埴輪が採用された背景としても、こうした分布圏や生産の中心地との近さを反映したものである可能性を示唆するものといえるだろう。

小型前方後円墳の多様性 亀塚古墳のように埴輪をもつ全長 20 m 級の前方後円墳は、5 世紀後葉から 6 世紀前葉にかけて、遠江で数多く構築されている。近年の発掘調査によって郷ヶ平 3 号墳

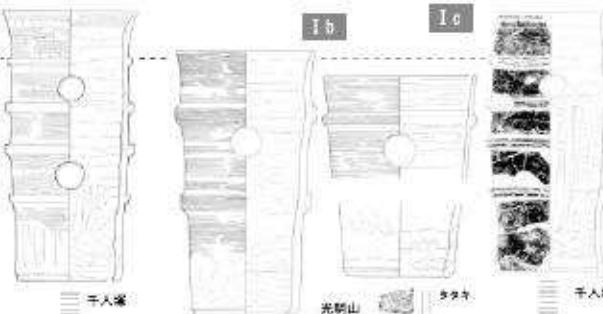
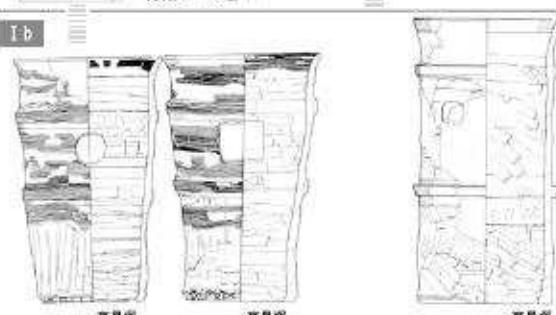
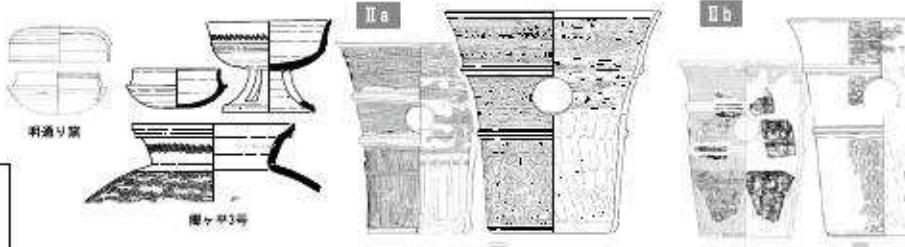
西暦	須恵器	円筒埴輪	特記事項
425	(TK73) TK216	[Ia] [Ib] [Ic]  千人塚 光明山 タタキ 千人塚	淡輪技法の導入
	450		
475	TK208	[Ib]  京見塚 京見塚 京見塚	2条3段構成の確立
	TK23	[IIa] [IIb]  明通り窯 南ヶ平3号 一ノ宮 横ヶ平3号 明通り窯 横ヶ3号	II類の成立 人物・動物埴輪の本格導入
500	H11 TK47	[IIa] [IIb]  神内平1号 二子塚 遠田平1号 二子塚 遠田平1号 二子塚 神内平1号 [2条4段]	IIa類と IIb類の並立 第1段ヨコハケの盛行
	H10 MT15	[IIb]  江吉山3号 江吉山4号 横瀬平山6号 峰塚窯 古利穂神社 [2条4段]	第1段ヨコハケの衰退
525	TK10	[IIc]  0 1.10 20cm 魚塚	2次調整 ヨコハケの衰退

Fig.12 三遠地域における淡輪系埴輪の変遷

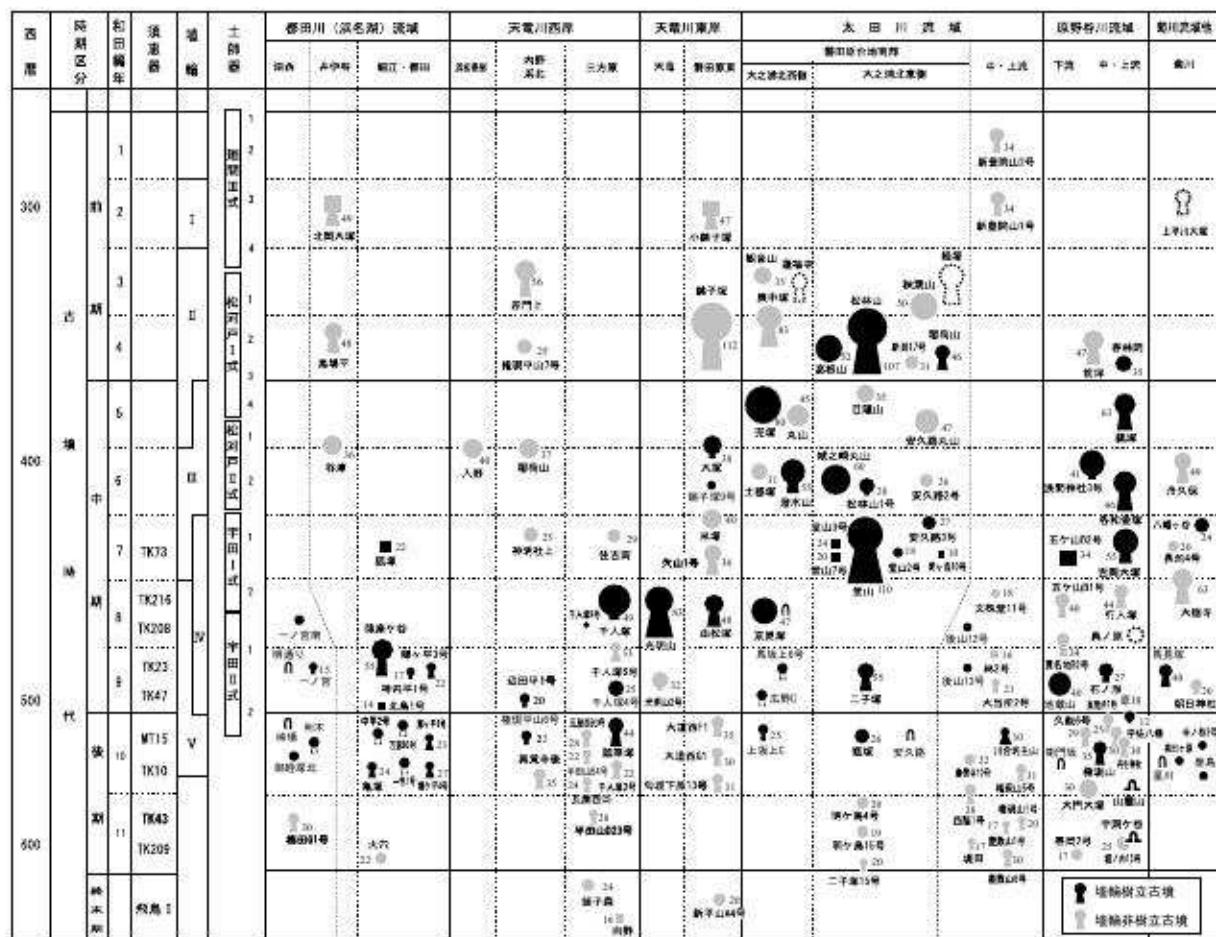


Fig.13 遠江における埴輪樹立古墳の変遷

や6号墳が前方後円墳であることが判明したことから、都田川流域におけるこの時期の埴輪樹立古墳は小型の前方後円墳である傾向が高いことが鮮明になった。同時期の埴輪をもつ小規模古墳である中平2号墳、吉影D3号墳など、墳形にかかわる情報が不明瞭な事例についても今後、前方後円墳である可能性を考慮すべきといえるだろう。埴輪の樹立と小型前方後円墳が組み合う事例は、一ノ宮古墳など、浜名湖の西岸にあたる現在の湖西市域にも認められる。こうした傾向は、埴輪を採用せず横穴式木室を埋葬施設とする三方原台地東縁から磐田原台地縁辺の小型前方後円墳と明確な違いがある。小型前方後円墳の被葬者を新興首長層として一括して捉えるだけでなく、埴輪採用の有無や埋葬施設の特徴から、それぞれの性格をあとづける作業が待たれる。

亀塚古墳築造の意義 亀塚古墳の被葬者が活躍した地域には、都田川流域を含め浜名湖を取り囲む比較的広い領域で括ることができる一体性があったことがうかがえる。この領域は、三方原台地縁辺の地域とはやや距離があり、むしろ三河地域と親和性が高いことも特徴である。

首長墓の築造そのものが希薄な当地に前方後円墳が築かれた背景には、隣接する都田川流域の諸地域で進んでいた地域開発（鈴木2012）に誘発され、農業振興や殖産興業を当地もたらした新興首長の登場が想定できる。また、そこに採用された埴輪の特徴からは、その被葬者が都田川流域勢力との関係のみならず、浜名湖西岸地域との交流を持ち備えるような自立性も備えていたことがうかがえる。奈良時代、当地域は遠江国敷智郡に編入されるが、『和名類聚抄』の中にみえる郷名「和治」として伝えられる地域社会統合の契機の一つがこの古墳の造営にあったと評価できるだろう。

Tab.2 浜松市内の前方後円墳

順位	名称	所在地	全長(m)	葺石	埴輪	埋葬施設	築造時期	現状
1	光明山古墳	天竜区	83	○	○	—	5世紀前葉	県指定史跡
2	赤門上古墳	浜北区	56	○	—	—	4世紀中葉	県指定史跡
3	陣塚ヶ谷古墳	北区	55	—	○	—	5世紀後葉	県指定史跡
4	北岡大塚古墳	北区	49	—	—	—	4世紀前葉	市指定史跡
5	馬場平古墳	北区	48	○	—	粘土櫛	4世紀中葉	市指定史跡
6	瓢箪塚古墳	東区	44	—	○	木炭櫛	6世紀前葉	三方原学園内
7	興覚寺後古墳	浜北区	35	—	—	横穴式石室	6世紀中葉	市指定史跡
8	千人冢6号墳	東区	33	—	—	—	5世紀後葉か	三方原学園内
9	半田山D23号墳	東区	28	—	—	横穴式石室	6世紀後葉	消滅
10	瓦屋西B3号墳	東区	28	—	—	横穴式木室	6世紀前葉	消滅
11	郷ヶ平4号墳	北区	27	—	○	—	6世紀前葉	市指定史跡
12	亀塚古墳	西区	24	—	○	—	6世紀前葉	市指定史跡
13	瓦屋西C5号墳	東区	24	—	—	横穴式木室	6世紀前葉	消滅
14	郷ヶ平6号墳	北区	23	—	○	—	6世紀前葉	一部消滅
15	郷ヶ平3号墳	北区	22	—	○	—	5世紀後葉	消滅
16	半田山B4号墳	東区	22	—	—	横穴式木室	6世紀前葉	消滅
17	千人冢2号墳	東区	22	—	—	—	6世紀前葉	三方原学園内
18	癪現平山6号墳	浜北区	22	—	○	—	6世紀前葉	消滅
19	辺田平1号墳	浜北区	20	—	○	木棺直葬	5世紀後葉	消滅
20	神内平1号墳	北区	17	—	○	—	5世紀後葉	消滅

2 今後の展望

亀塚古墳は浜名湖東岸域における唯一の前方後円墳であり、測量調査によって墳丘規模が根拠をもって想定できるようになった意義は大きい。現在、浜松市における前方後円（方）墳は、20基が知られている（Tab.2）。亀塚古墳はこのうち12番目の大きさに位置づけられる。亀塚古墳を除く市内の前方後円（方）墳は、県・市等の指定史跡や県立の施設用地（三方原学園）内で保護がはかれているか、発掘調査等を経て全域もしくは大部分が消滅しているか、のいずれかである。

浜名湖東岸域における前方後円墳の希少性と墳丘の残存状況をふまえると、亀塚古墳の重要性は多くの市民にも理解されるだろう。今後は、発掘調査などを通じ、周溝の確認や、段築や埴輪樹立状況などの墳丘構造の把握が求められる。また、墳丘部分は、耕作による改変が進行する懸念があるため、早急に保護をはかり、活用にも適した環境整備を進めることが望まれる。

註

- (1) ただし、亀塚古墳の築造時期については、採集されている須恵器の時期認識を根幹にしていることは留意すべきである。本書に示した採集資料を見ても、Fig.9-3 や 4 のように、MT15型式に近い形態のものも認めることができる。採集された須恵器に時期差を積極的に見出すことによって、亀塚古墳の築造時期を6世紀初頭（MT15型式期）に近づけて捉えることもできることも可能である。

参考文献

- 鈴木一有 2012「三遠地域における淡輪系埴輪の変遷とその意義」『郷ヶ平古墳群』（財）浜松市文化振興財団
鈴木一有 2018「遠江における円筒埴輪の編年の到達点と課題」『東海の埴輪—出現と終焉、地域性を探る—』

第31回考古学研究会東海例会

- 鈴木一有 2019「光明山古墳の構造と築造時期」『光明山古墳』浜松市教育委員会

- 鈴木敏則 1990「遠江の淡輪系埴輪」『転機』第3号 転機刊行会

- 鈴木敏則 1994「淡輪系円筒埴輪」『古代文化』第46巻第2号 財団法人古代學協会

- 鈴木敏則 2003「淡輪系円筒埴輪2003」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』

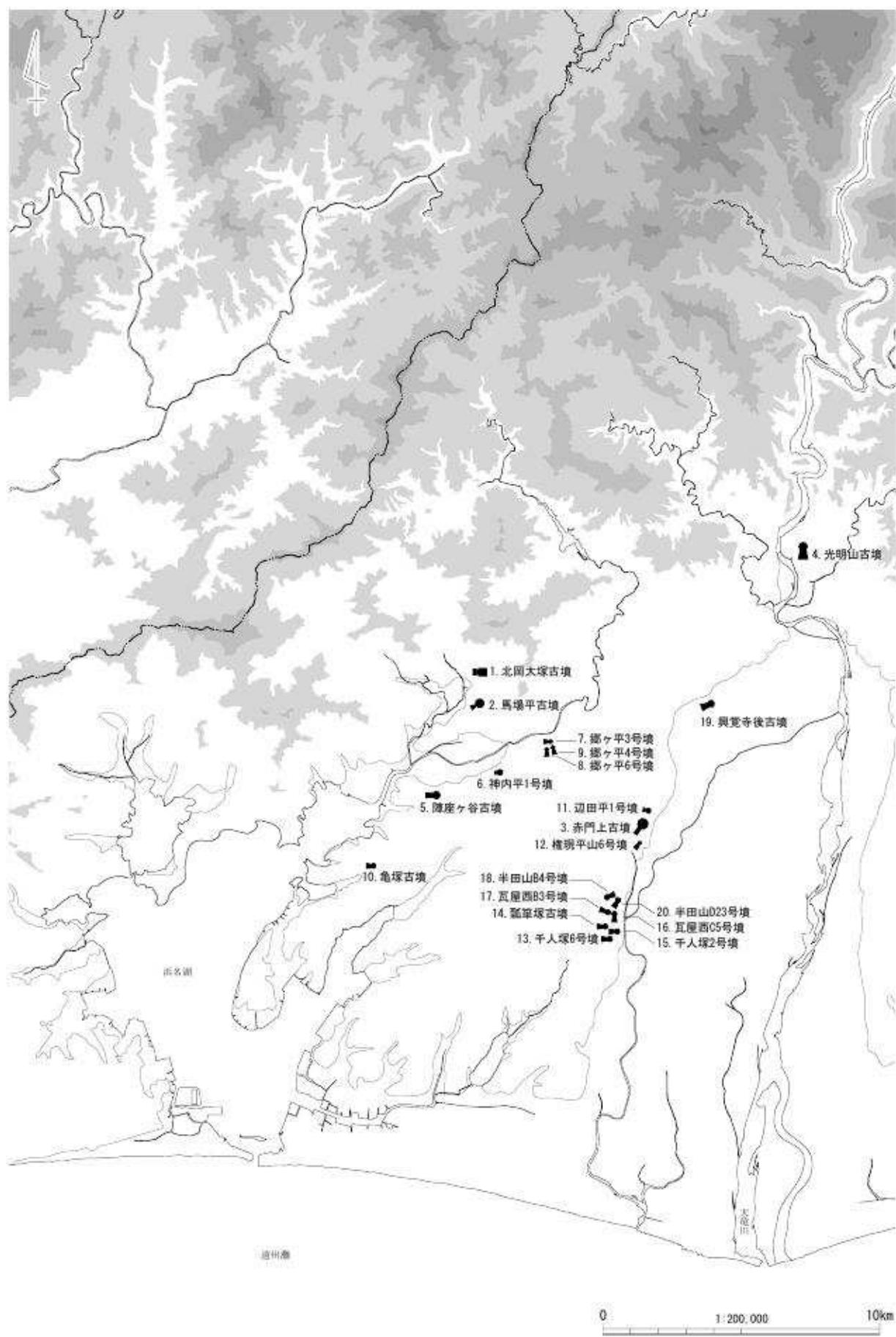
第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会

- 和田達也 2016「亀塚古墳の採集遺物」『平成26年度浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会

附 編

浜松市の前方後円（方）墳集成

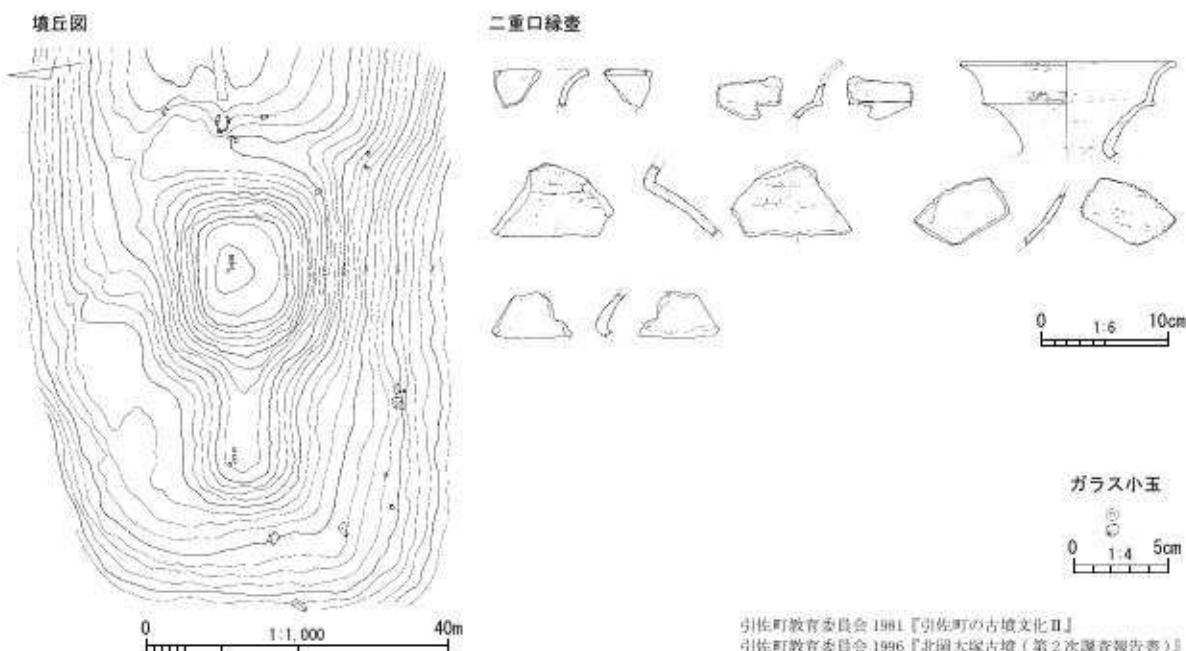




浜松市内の前方後円（方）墳分布図

1 北岡大塚古墳（北区引佐町井伊谷）

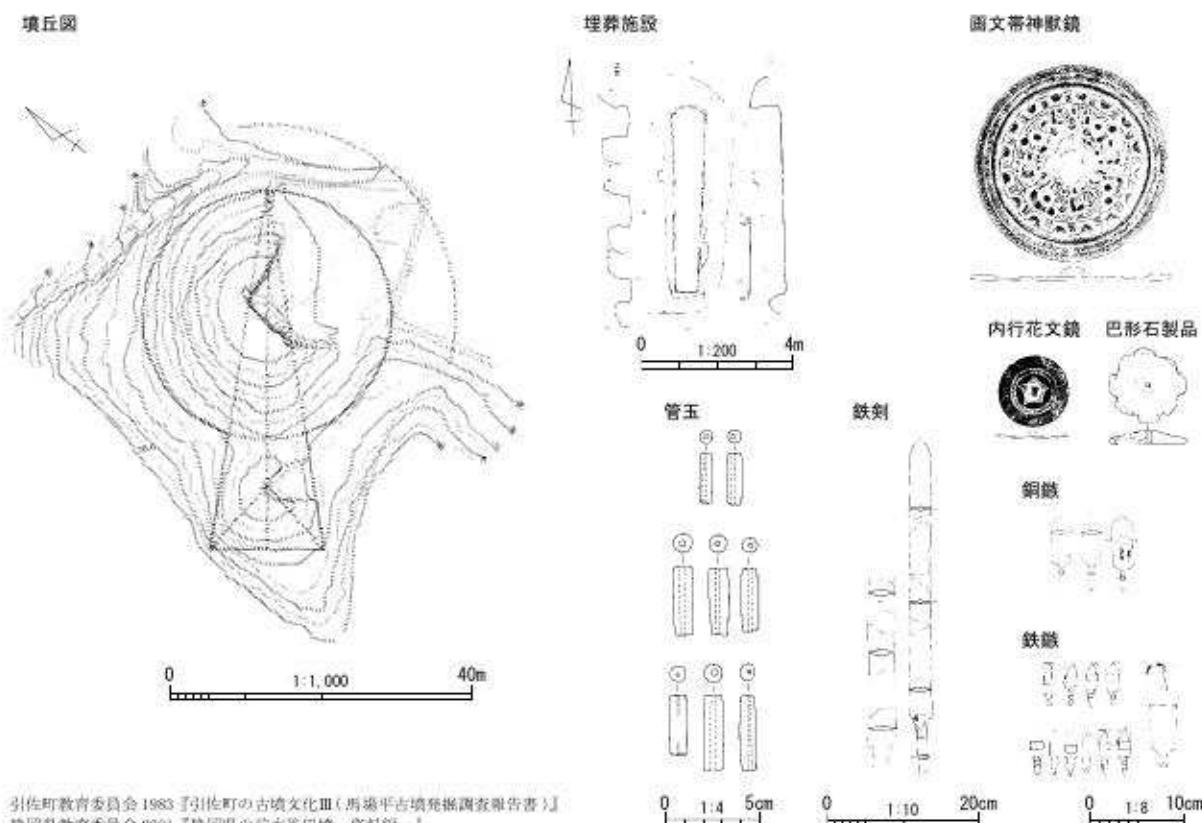
墳形：前方後方墳（全長 49.5m） 築造時期：古墳時代前期（4世紀前葉） 埋葬施設：未調査 舟石：なし
出土遺物：二重口縁壺、ガラス小玉



引佐町教育委員会 1981『引佐町の古墳文化Ⅱ』
引佐町教育委員会 1996『北岡大塚古墳（第2次調査報告書）』

2 馬場平古墳（北区引佐町井伊谷）

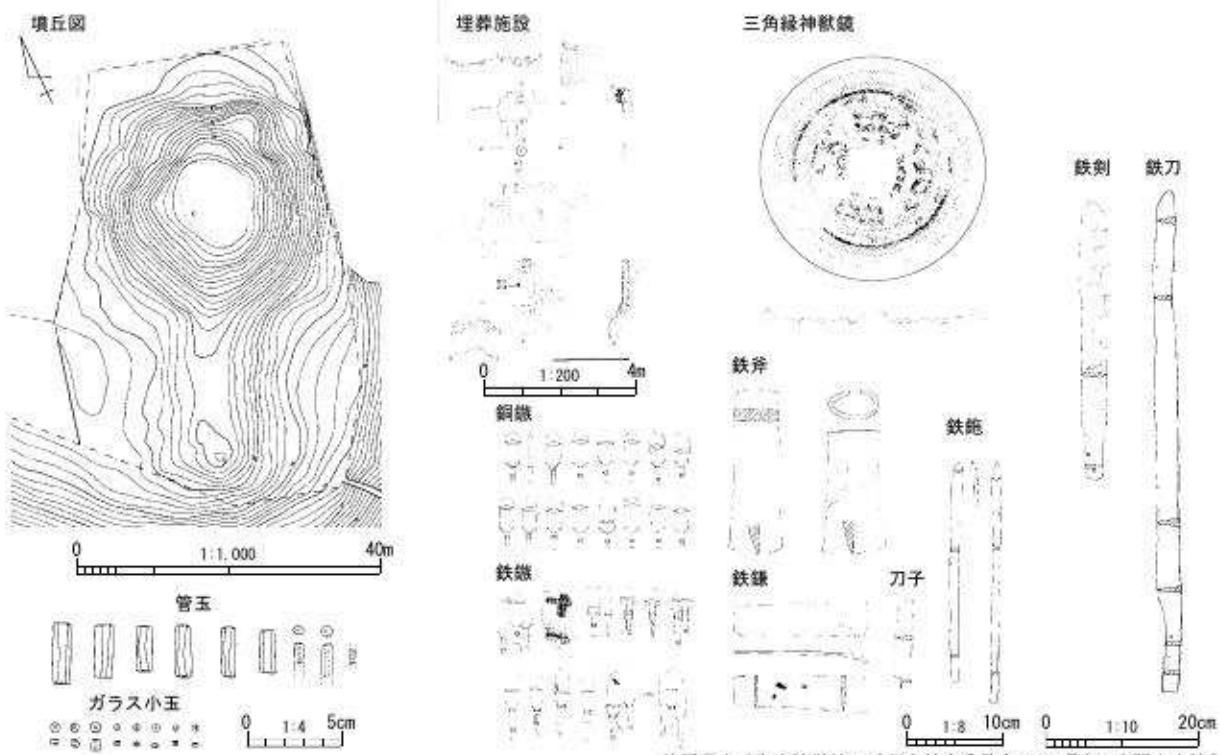
墳形：前方後円墳（全長 47.5m） 築造時期：古墳時代前期（4世紀中葉） 埋葬施設：粘土櫛・組合式箱形木棺
舟石：あり 出土遺物：画文帶神獸鏡、内行花文鏡、鉄劍、鉄鎌、銅鎌、巴形石製品、管玉



引佐町教育委員会 1983『引佐町の古墳文化Ⅲ（馬場平古墳発掘調査報告書）』
静岡県教育委員会 2001『静岡県の前方後円墳－資料編－』

3 赤門上古墳（浜北区内野）

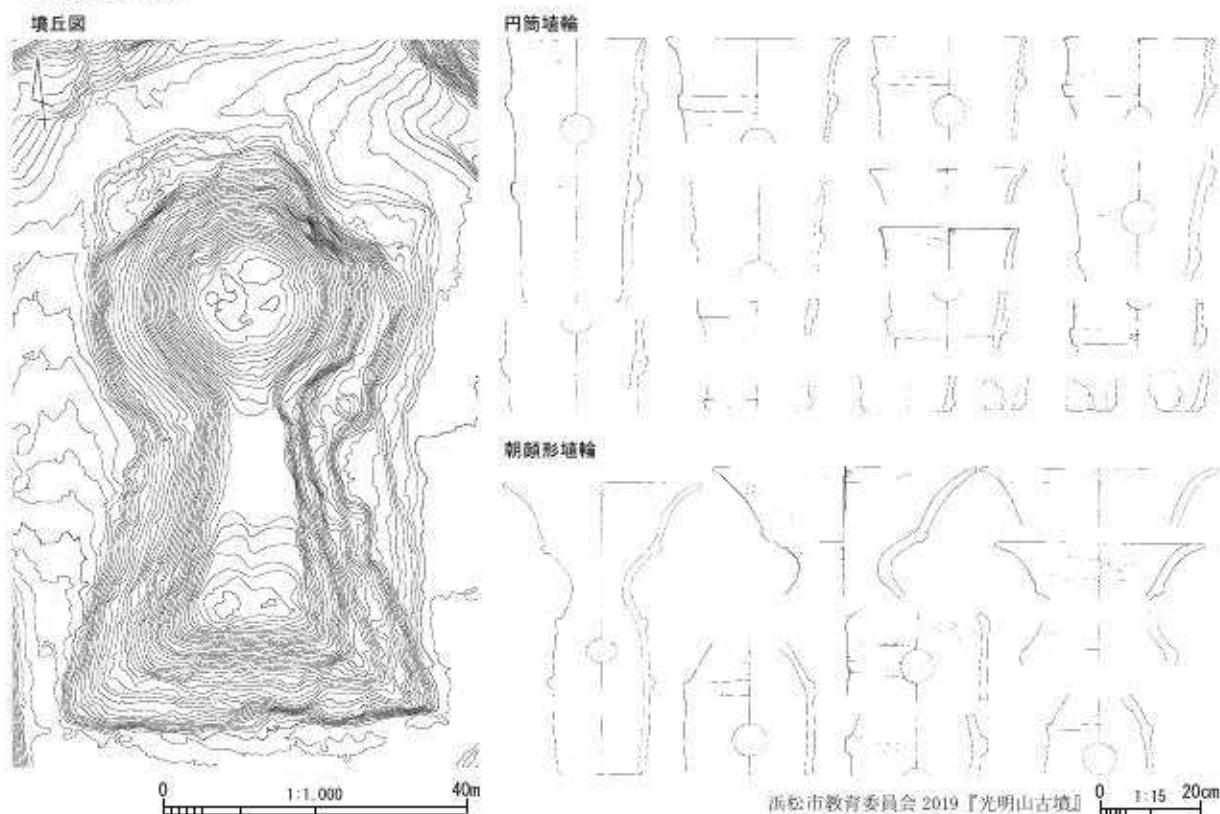
墳形：前方後円墳（全長 56.3m） 築造時期：古墳時代前期（4世紀中葉） 埋葬施設：割竹形木棺直葬 茅石：あり
出土遺物：三角縁神獣鏡・管玉・鉄劍・鉄刀・鉄鎌・銅鎌・刀子・鉄鏟・鉄斧



静岡県立浜名高等学校・浜北市教育委員会 1966『遠江赤門上古墳』
浜北市教育委員会 2004『浜北市史 資料編 原始・古代・中世』

4 光明山古墳（天竜区山東）

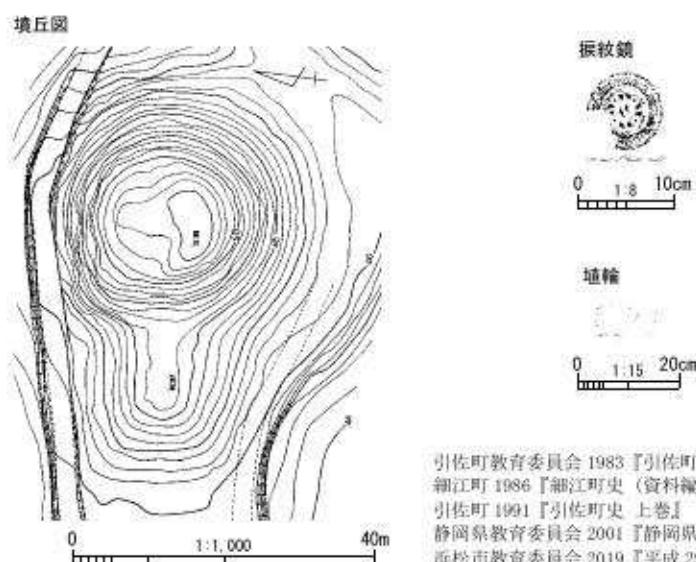
墳形：前方後円墳（全長 83m） 築造時期：古墳時代中期（5世紀前葉） 埋葬施設：未調査 茅石：あり
出土遺物：埴輪



浜松市教育委員会 2019『光明山古墳』

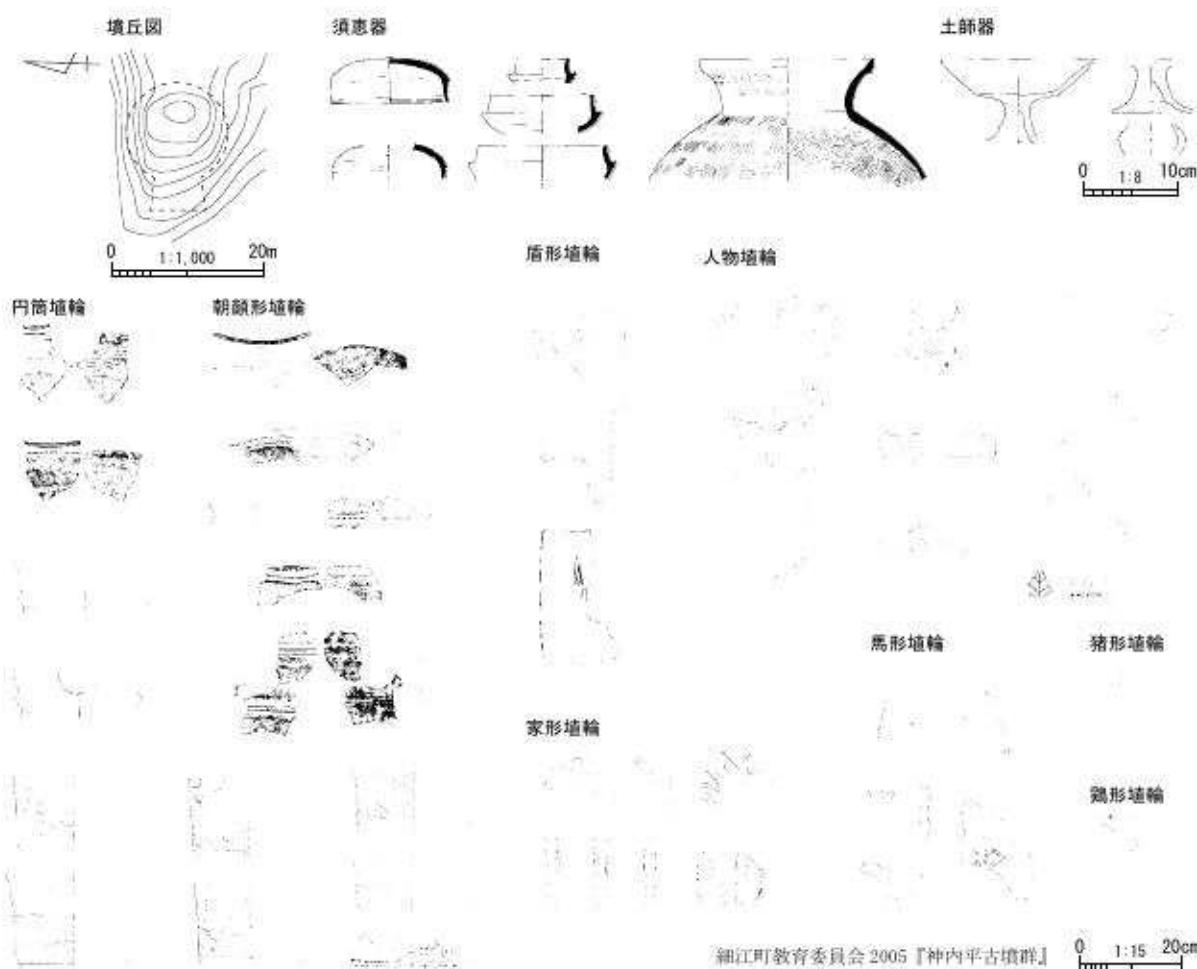
5 陣座ヶ谷古墳（北区細江町中川）

墳形：前方後円墳（全長 55m） 築造時期：古墳時代中期（5世紀後葉） 埋葬施設：木棺直葬か 葦石；不明
出土遺物：振紋鏡、鉄刀、埴輪（円筒埴輪）



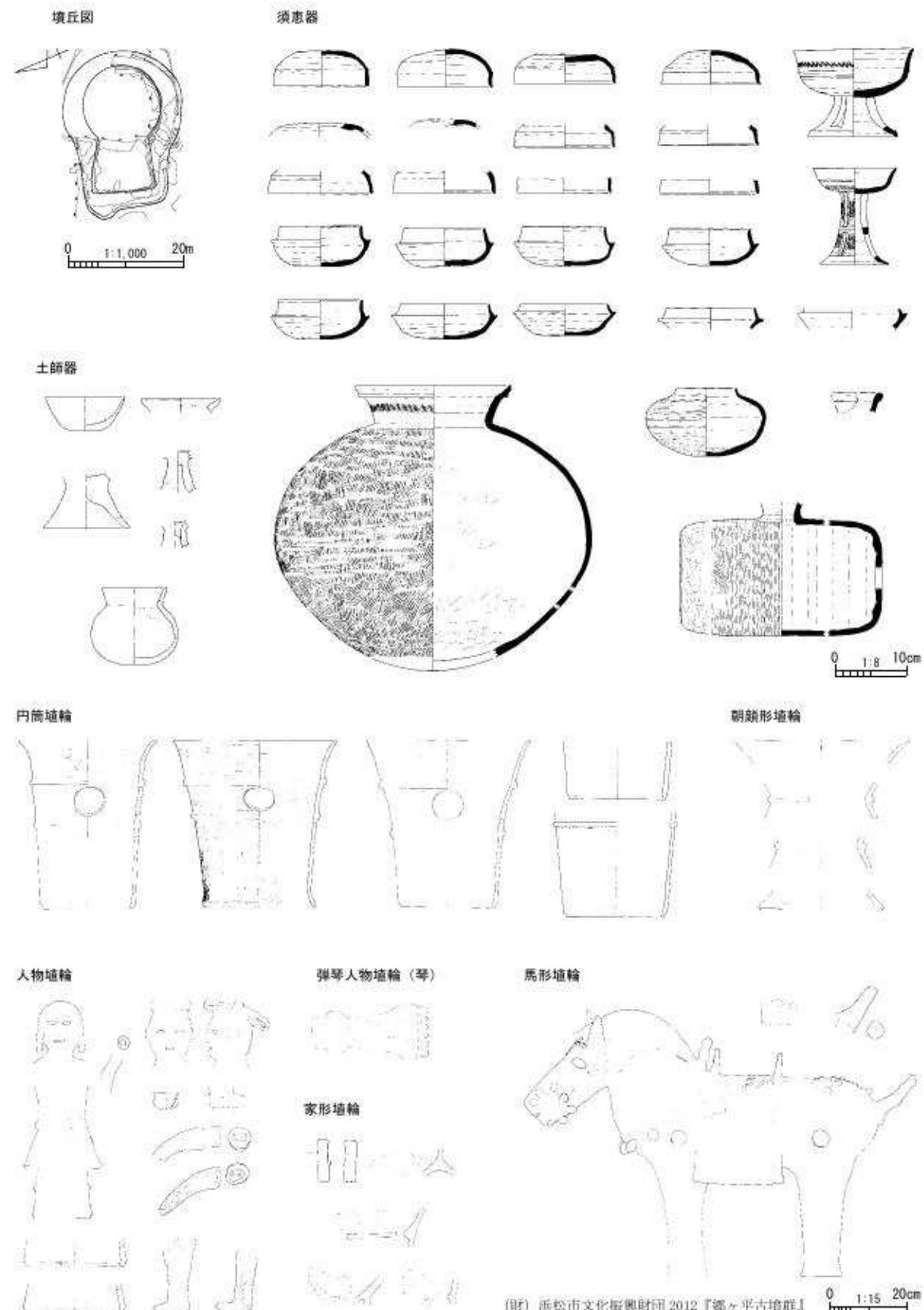
6 神内平1号墳（北区細江町中川）

墳形：前方後円墳（全長 17m前後） 築造時期：古墳時代中期（5世紀後葉） 埋葬施設：不明（消滅） 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、埴輪



7 郷ヶ平3号墳（北区都田町）

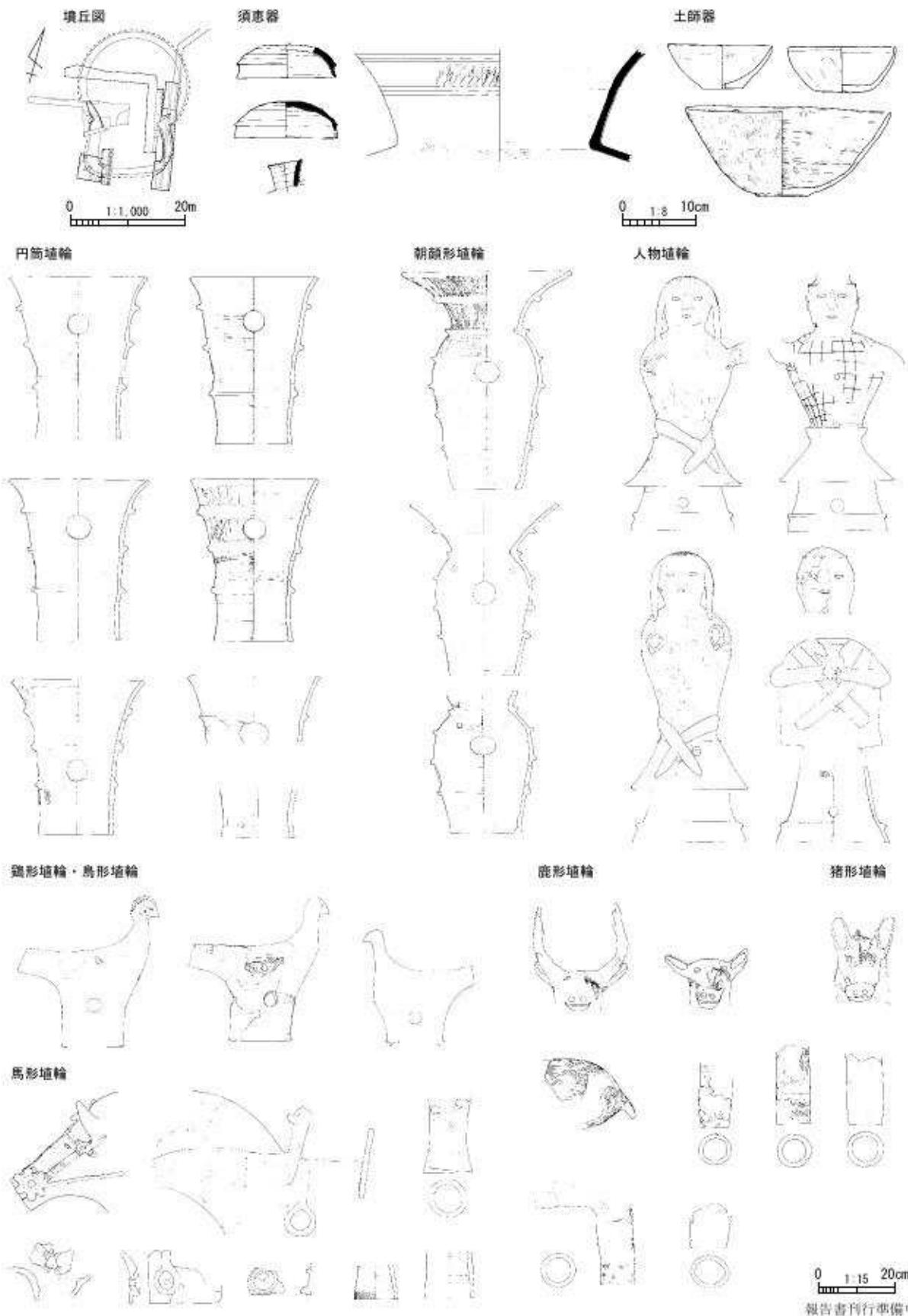
墳形：前方後円墳（全長 22.3m） 築造時期：古墳時代中期（5世紀後葉） 埋葬施設：不明（消滅） 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、埴輪



(財) 浜松市文化振興財团 2012『郷ヶ平古墳群』

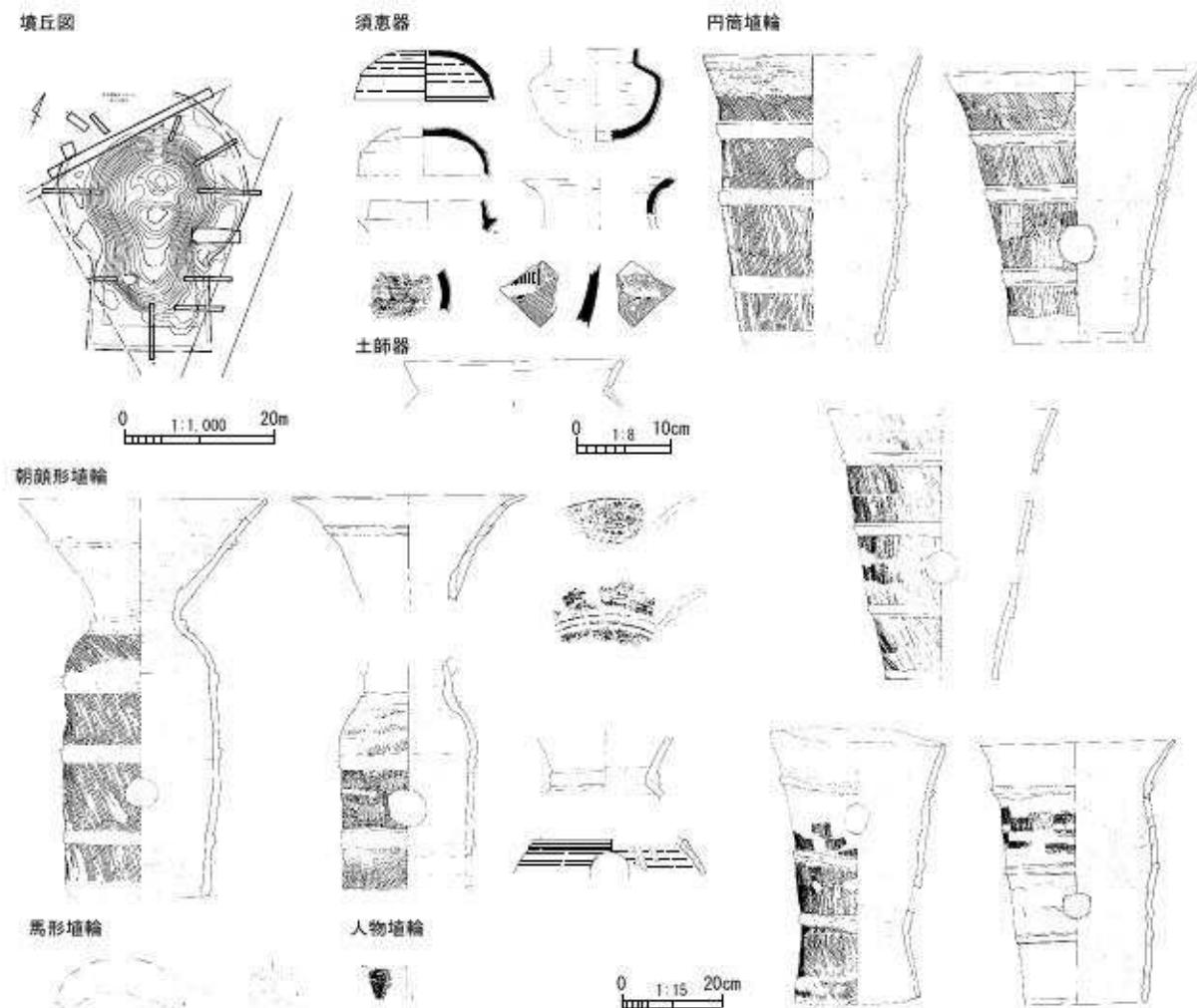
8 網ヶ平6号墳（北区都田町）

墳形：前方後円墳（全長推定 23m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：不明（消滅） 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、埴輪



9 郷ヶ平4号墳（北区都田町）

墳形：前方後円墳（全長27m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：未調査 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、埴輪



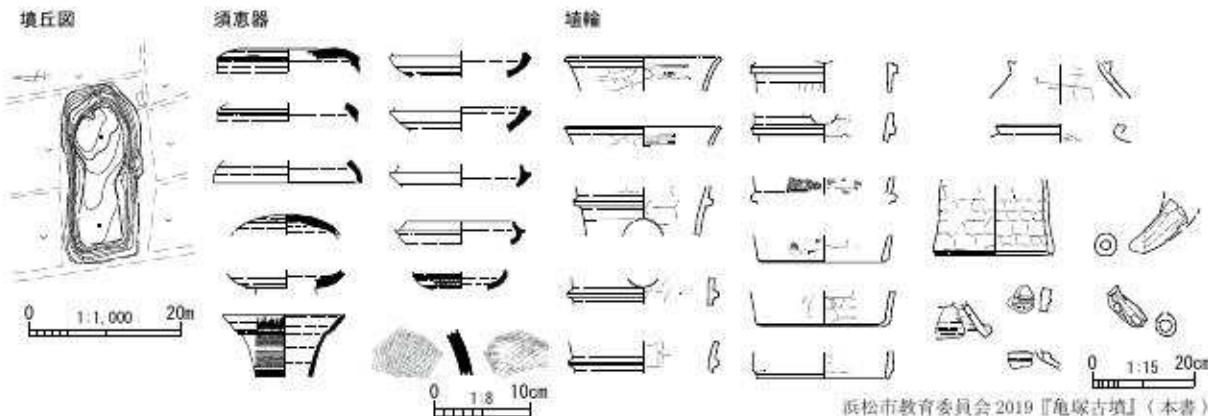
静岡県教育委員会 2001「郷ヶ平4号墳（浜松市）」『静岡県の前方後円墳一箇別報告編一』

（財）浜松市文化振興財団 2006『郷ヶ平4号墳II』

浜松市教育委員会 2014「郷ヶ平古墳群5次調査報告書 -郷ヶ平4号墳の調査成果-」『平成24年度浜松市文化財調査報告』

10 亀塚古墳（西区興松町）

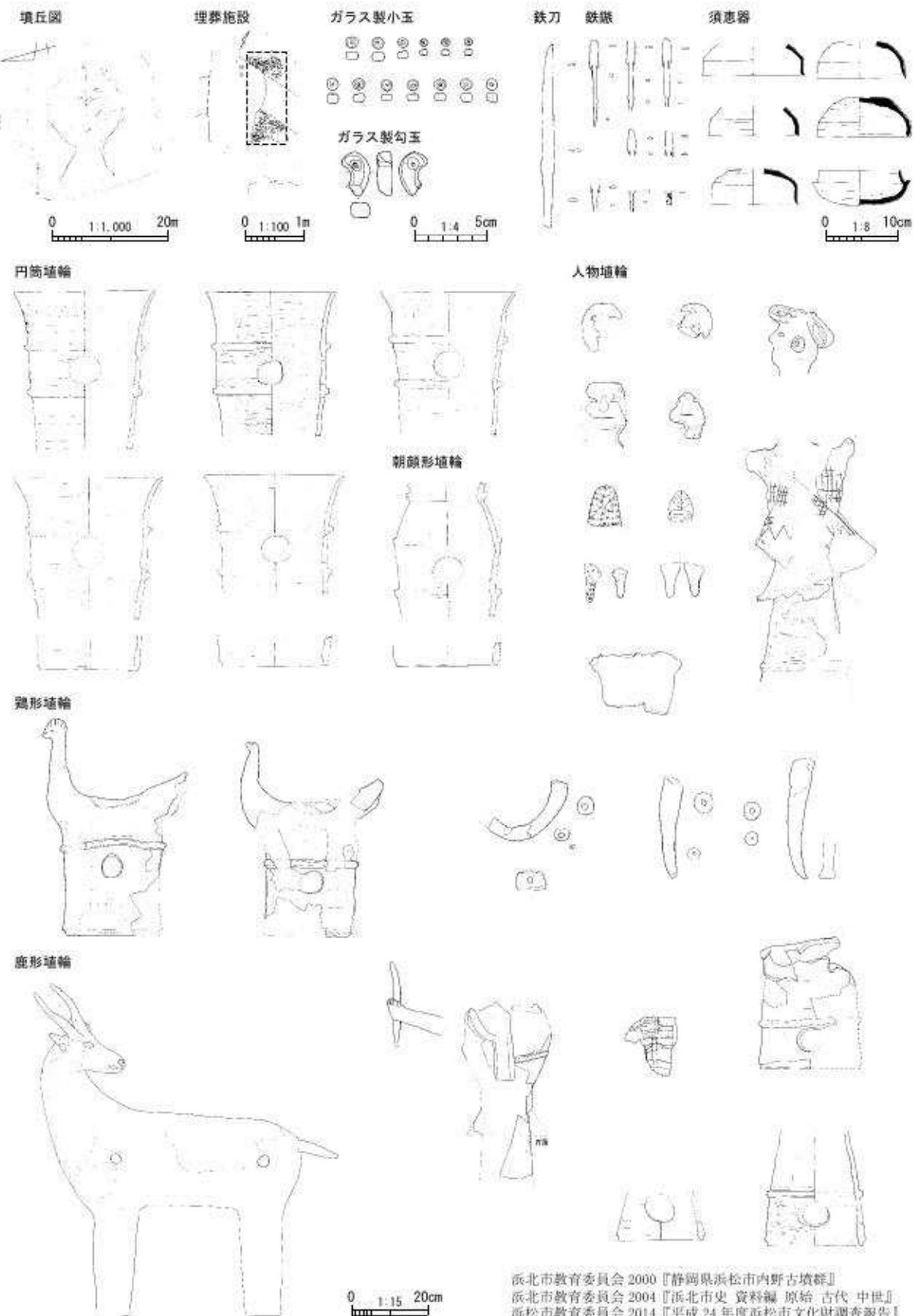
墳形：前方後円墳（全長24m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：不明 葦石：なし
採集遺物：須恵器、埴輪



浜松市教育委員会 2019「亀塚古墳」（本書）

11 辺田平1号墳（浜北区平口）

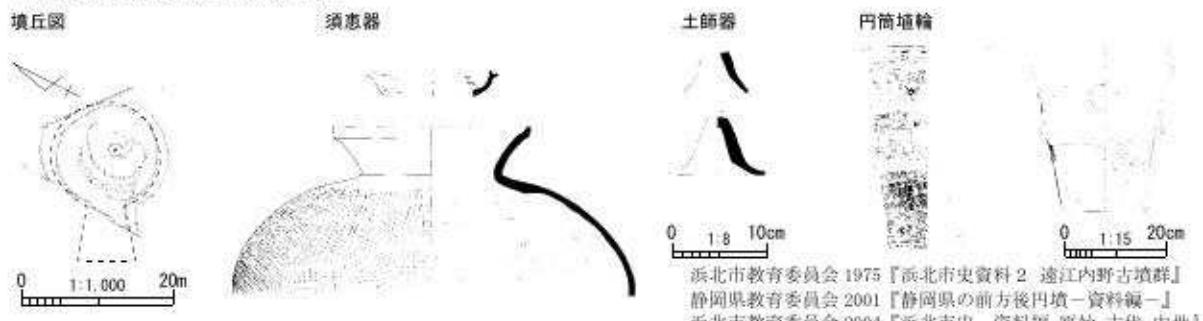
墳形：前方後円墳（全長 20.1m） 築造時期：古墳時代中期（5世紀後葉） 埋葬施設：木棺直葬（疊床） 葦石：なし
出土遺物：ガラス製勾玉、小玉、鐵鐵、鉄刀、須恵器、埴輪



浜北市教育委員会 2000『静岡県浜松市内野古墳群』
浜北市教育委員会 2004『浜北市史 資料編 原始・古代・中世』
浜松市教育委員会 2014『平成24年度浜松市文化財調査報告』

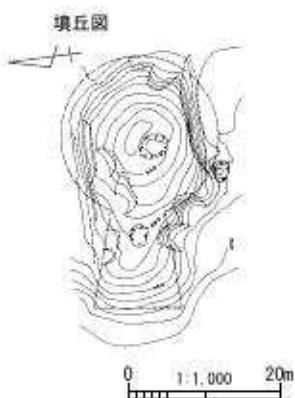
12 権現平山6号墳（浜北区内野台）

墳形：前方後円墳（全長推定 22m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：不明（消滅） 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、埴輪



13 千人塚6号墳（東区有玉西町）

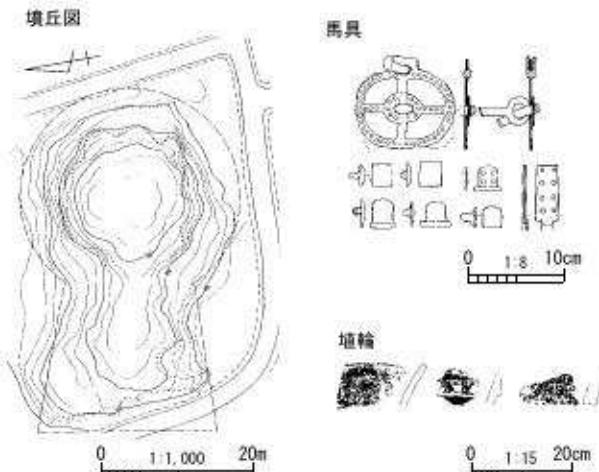
墳形：前方後円墳（全長 33m）
築造時期：古墳時代中期（5世紀後葉か）
埋葬施設：未調査 葦石：不明 出土遺物：なし



浜松市教育委員会 1998
『千人塚古墳、千人塚平・宇藤塚古墳群』

14 瓢箪塚古墳（東区有玉西町）

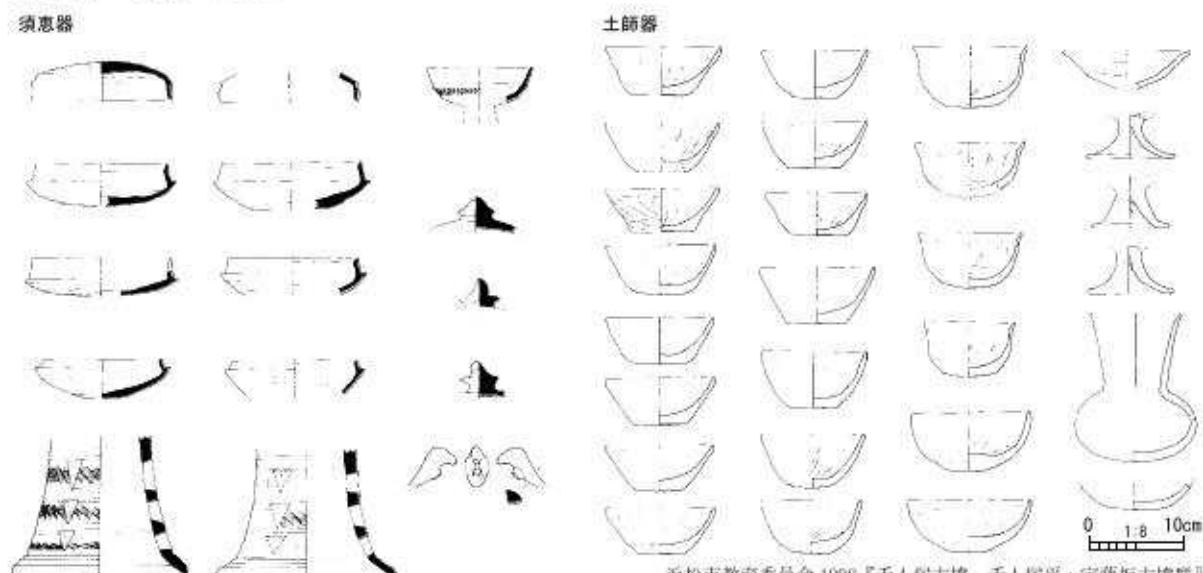
墳形：前方後円墳（全長 44m）
築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉）
埋葬施設：木炭櫛 葦石：なし 出土遺物：埴輪・馬具



山口欣次・市川和夫 1951『三方原瓢箪塚古墳発掘概報』
『上代文化』第20編 国學院大學考古学会
浜松市教育委員会 1998『千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群』

15 千人塚2号墳（東区有玉西町）

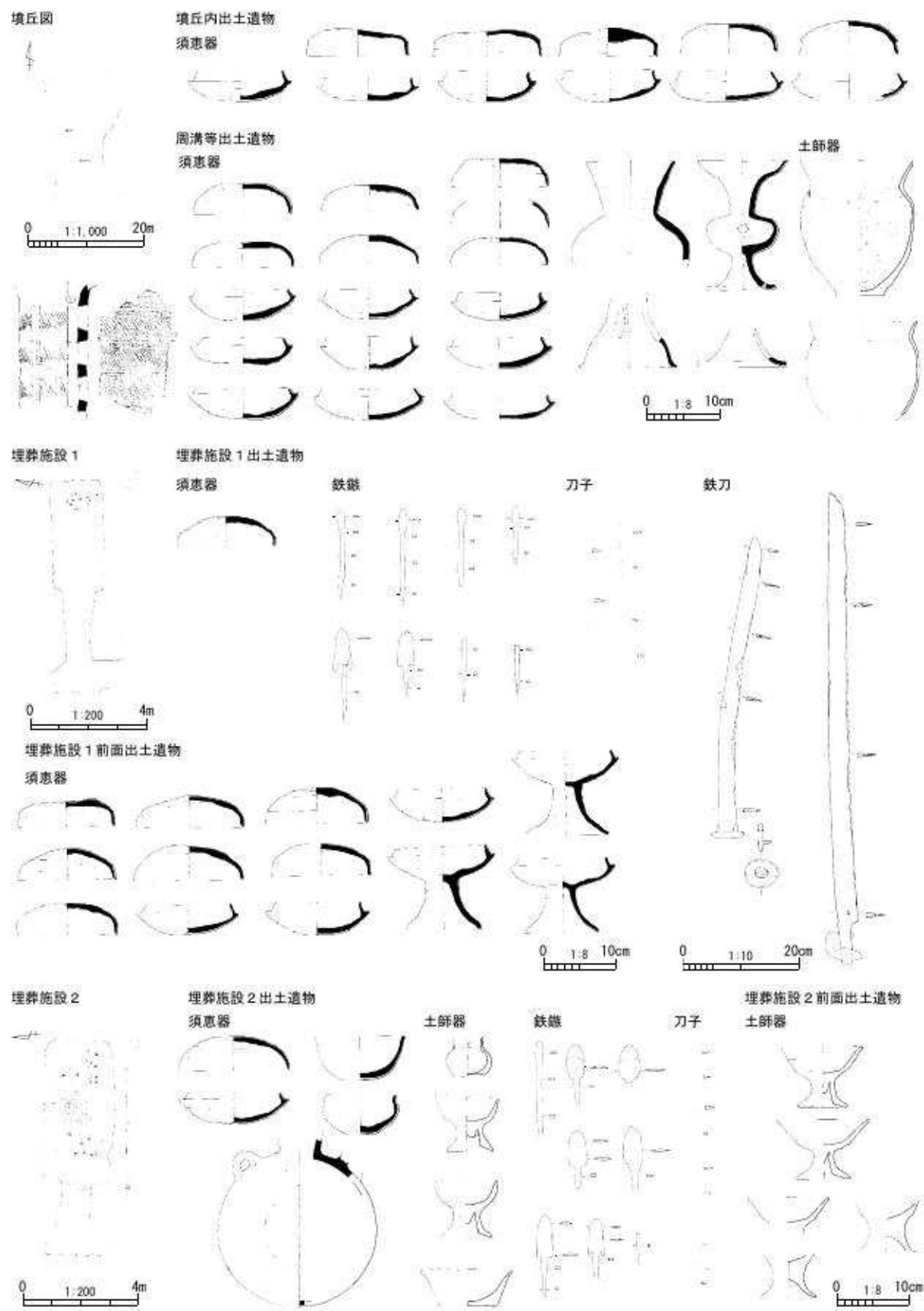
墳形：前方後円墳（全長推定 22m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：未調査 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器



浜松市教育委員会 1998『千人塚古墳、千人塚平・宇藤坂古墳群』

16 瓦屋西 C5 号墳 (東区有玉西町)

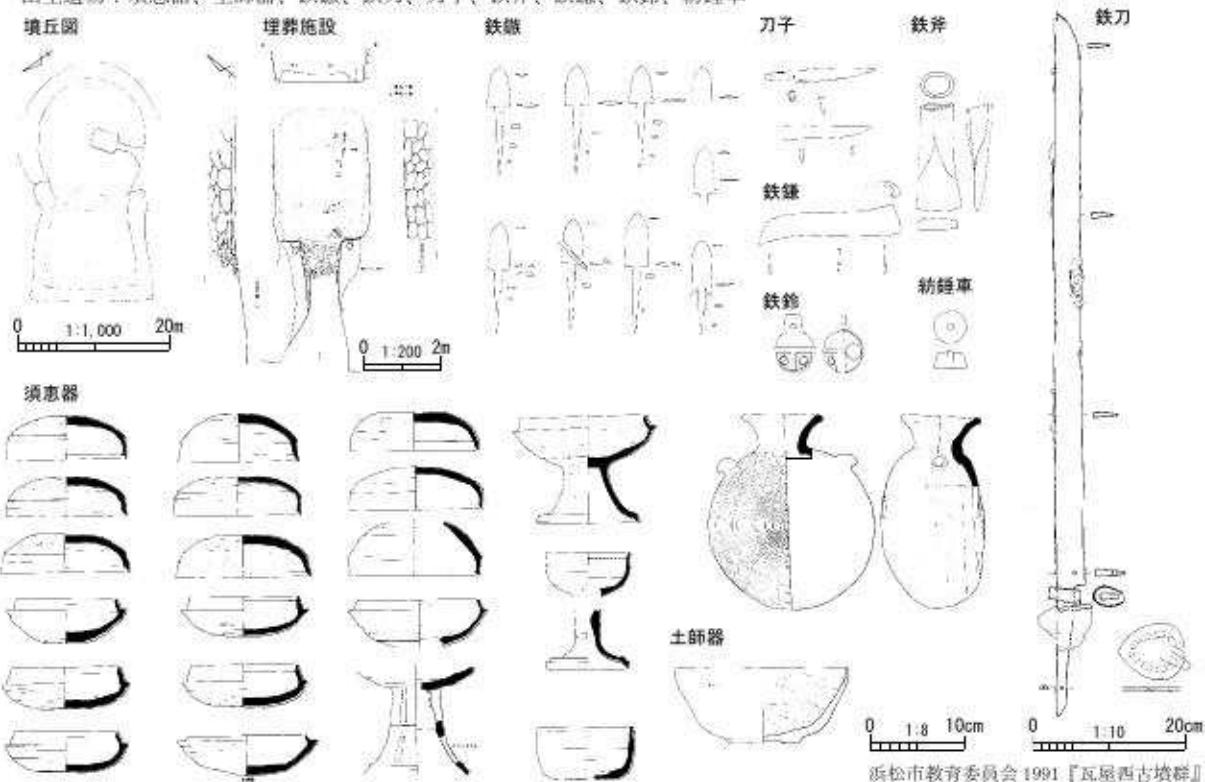
墳形：前方後円墳（全長 24m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：横穴式木室2室（追葬） 葦石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、鉄鎌、刀子、鉄刀



(財)浜松市文化協会 1991『有玉西地区面整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 上巻 瓦屋西C古墳群』

17 瓦屋西 B3 号墳 (東区有玉西町)

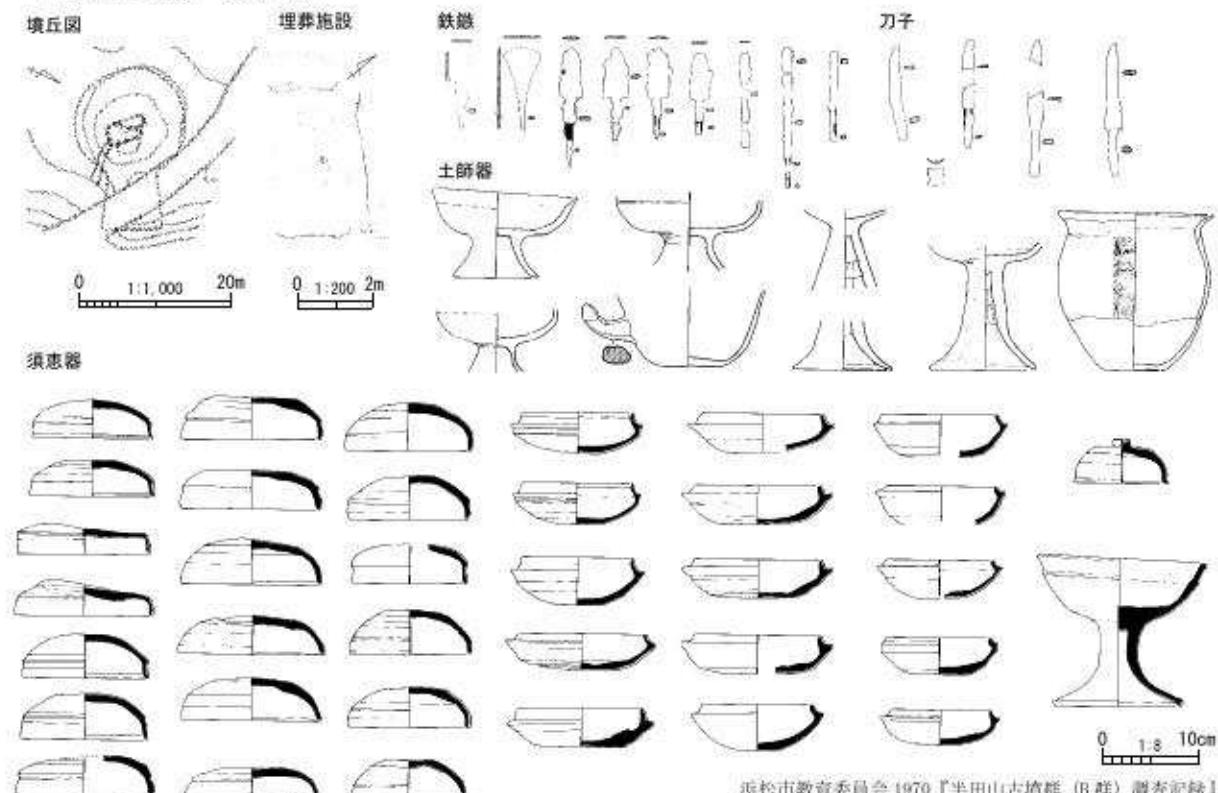
墳形：前方後円墳（全長 28m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：横穴式木室 葬石：なし
出土遺物：須恵器、土師器、鐵鎌、鉄刀、刀子、鉄斧、鐵鎌、鐵鎗、紡錘車



浜松市教育委員会 1991『瓦屋西古墳群』

18 半田山 B4 号墳 (東区半田町)

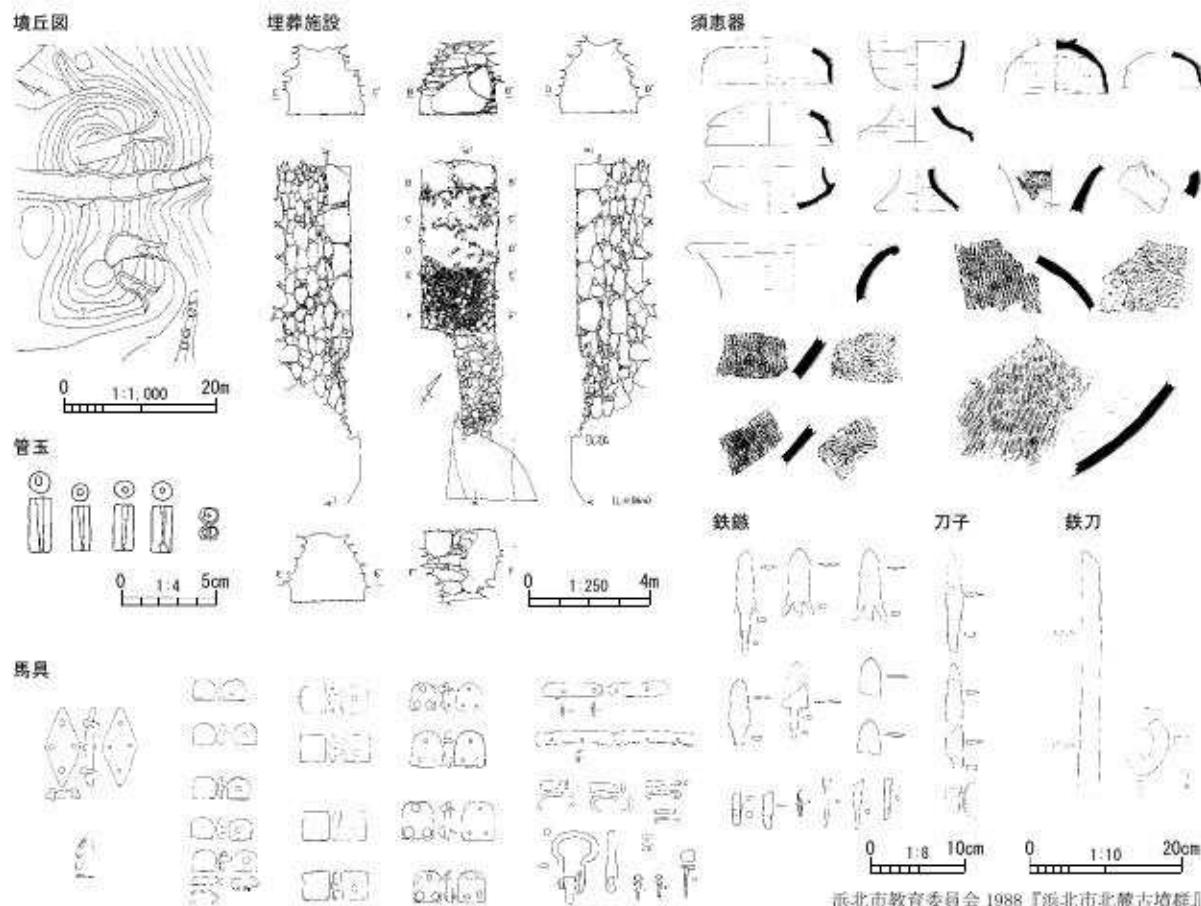
墳形：前方後円墳（全長 22m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀前葉） 埋葬施設：横穴式木室 葬石：なし
出土遺物：須恵器・鐵鎌・刀子



浜松市教育委員会 1970『半田山古墳群（B群）調査記録』

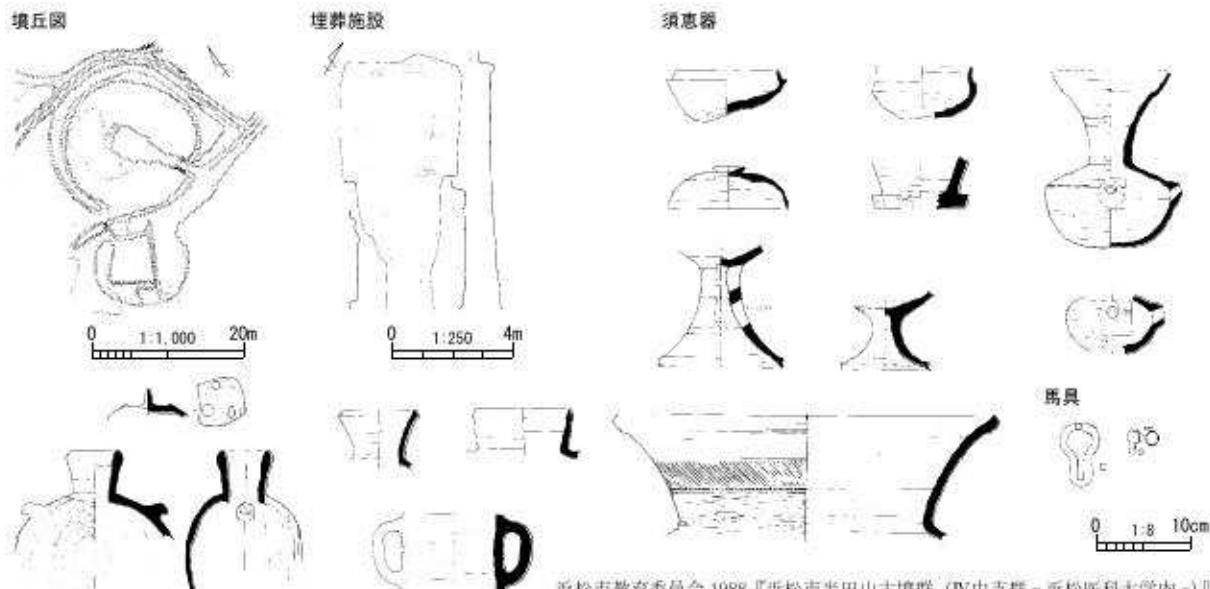
19 興覺寺後古墳（浜北区宮口）

墳形：前方後円墳（全長 35m） 築造時期：古墳時代前期（6世紀中葉） 埋葬施設：横穴式石室（片袖） 葦石：なし
出土遺物：須恵器・馬具・鐵鎌・刀子・鐵刀・管玉



20 半田山 D23 号墳（東区半田町）

墳形：前方後円墳（全長 28m） 築造時期：古墳時代後期（6世紀後葉） 埋葬施設：横穴式石室（両袖） 葦石：なし
出土遺物：須恵器・馬具



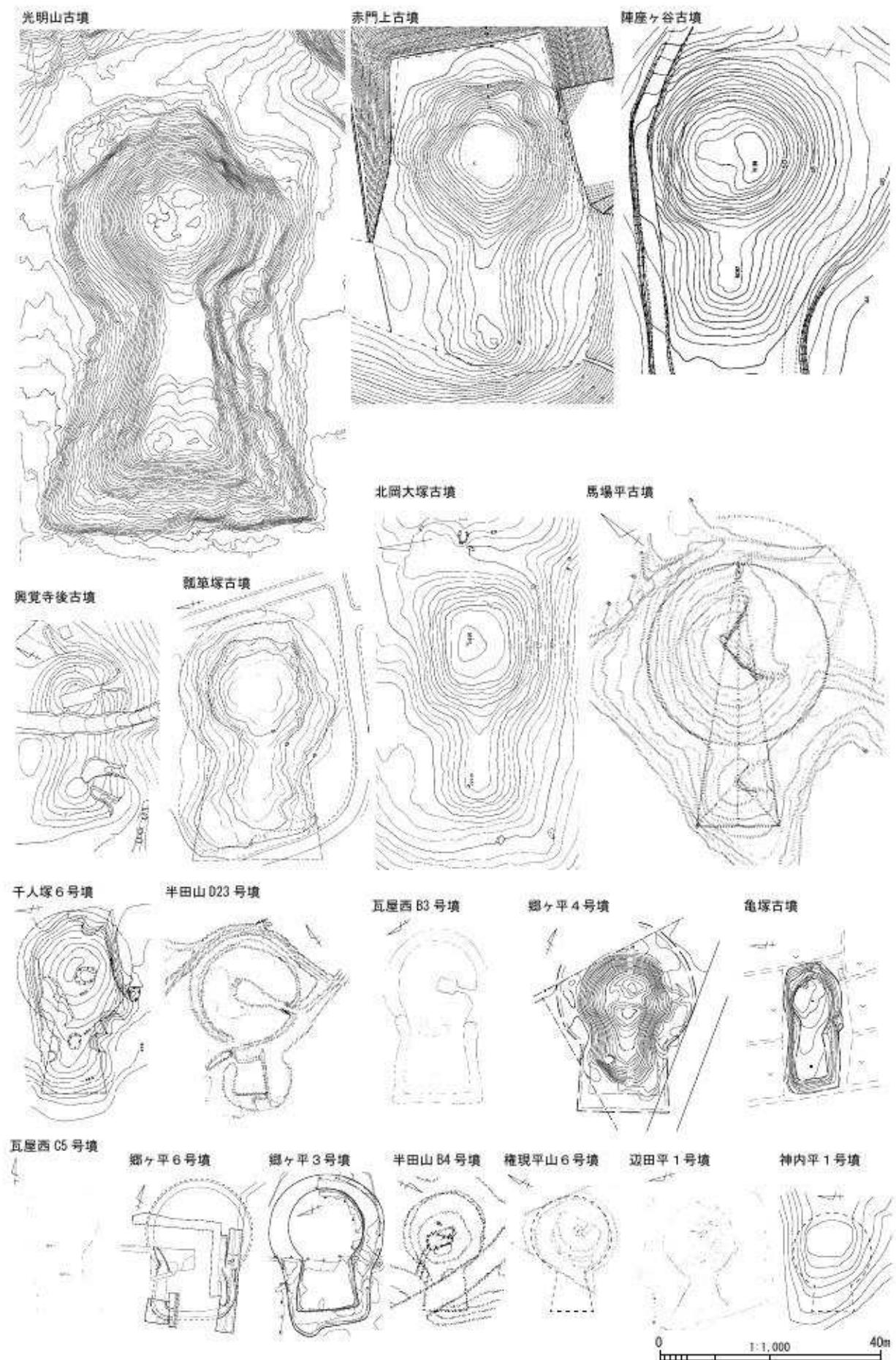


図 版

PLATE





1 龜塚古墳全景（南西上空から：1965年撮影）



2 龜塚古墳全景（南西から）



1 亀塚古墳全景（北東から）



2 亀塚古墳墳頂部の現状（西から）



3 亀塚古墳南側くびれ部の状況（西南から）



4 亀塚古墳前方部の現況（南から）



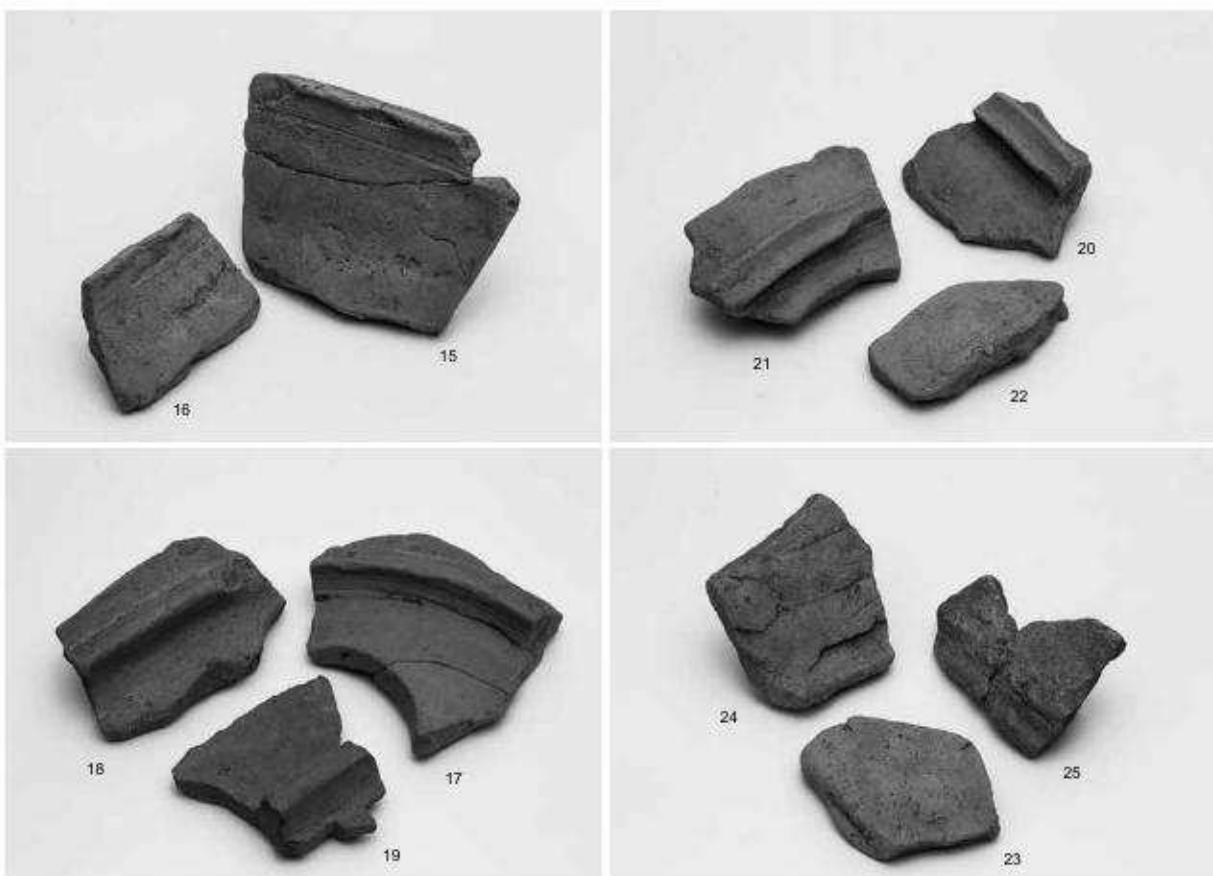
1 龟塚古墳主要採集遺物



2 龟塚古墳採集須恵器



1 龜塚古墳採集埴輪集合



2 龜塚古墳採集埴輪（1）



1 亀塚古墳採集埴輪（2）



2 打製石斧

3 程美窯產壺

報告書抄録

書名（ふりがな）	亀塚古墳（かめづかこふん）									
編著者名	川西啓喜 鈴木一有 和田達也									
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466									
発行年月日	2019年3月22日									
遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因			
亀塚古墳	静岡県 浜松市西区 吳松町	22133	03- 01- 13	34 度 46 分 10 秒	137 度 38 分 51 秒	2018年2月19日 ～ 2018年2月20日	300 m ²	遺跡の保護・活用に 関わる情報を 得るため		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
亀塚古墳	古 墳	古墳時代	古 墳 (前方後円墳)	石 器 埴 輪 須恵器 陶 器	墳丘が残存する全長 24m の前方後円墳					
要約										
亀塚古墳は、6世紀中葉に築造された浜松市西区で唯一墳丘が残存する全長 24m の前方後円墳で、埴輪や須恵器が伴う。墳丘裾部を中心に後世の攪乱が及んでいるが、前方後円墳の特徴を良好な状態で残していることが明らかになった。平成31年（2019）2月25日、亀塚古墳は浜松市の史跡に指定された。										

亀塚古墳

2019年3月22日

編集・発行機関 浜松市教育委員会
(浜松市市民部文化財課が補助執行)
印 刷 松本印刷 株式会社

Kamezuka Tumulus

Survey Report

A Report of Archaeological Inverstigation
on 6th Century tumulus in Western Shizuoka,Japan



March 2019

Hamamatsu Municipal Board of Education